

Oracle® Universal Content Management

Site Studio インストレーション・ガイド

10g リリース 4 (10.1.4)

部品番号 : B54364-01

2009 年 5 月

Oracle Universal Content Management Site Studio インストール・ガイド, 10g リリース 4 (10.1.4)

部品番号 : B54364-01

原本名 : Oracle Universal Content Management Site Studio Installation Guide, 10g Release 4 (10.1.4)

原本著者 : Sean Cearley

原本協力者 : Brian Cheyne, Ron van de Crommert

Copyright © 1996, 2009, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があり得ます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	iii
対象読者	iv
ドキュメントのアクセシビリティについて	iv
関連ドキュメント	iv
表記規則	iv
サポートおよびサービス	v
1 概要	
1.1 Site Studio について	1-2
1.2 システム要件	1-2
1.2.1 Content Server の要件	1-2
1.2.2 デザイナ・アプリケーションの要件	1-3
1.2.3 マネージャ・アプリケーションの要件	1-3
1.2.4 コントリビュータ・アプリケーションの要件	1-4
1.3 インストール・プロセス	1-4
1.4 ドキュメント	1-5
2 Site Studio コンポーネントのインストール	
2.1 インストール前の作業と考慮事項	2-2
2.2 以前のコンポーネントのアンインストール	2-2
2.3 新しいコンポーネントのインストールと有効化	2-3
2.4 インストール後の作業と考慮事項	2-4
2.4.1 デフォルトのプロジェクト・ドキュメント情報の設定	2-5
2.4.2 Apache Web サーバーの構成	2-5
2.4.3 Sun ONE Web サーバーの構成	2-6
2.4.4 SSUrlMapPlugin ファイルの更新	2-7
2.4.5 ゾーン・フィールドの構成	2-7
2.4.6 コンテンツ・サーバーでの JavaServer Pages の有効化	2-8
2.4.7 コンテンツ・サーバーでの Active Server Pages の構成	2-9
2.4.8 クラスタ化コンテンツ・サーバー環境での Active Server Pages の構成	2-9
2.5 コンテンツ・サーバー索引の再作成	2-11
2.6 Web サーバーの再起動	2-11
3 デザイナのインストール	
3.1 デザイナについて	3-2
3.2 システム要件	3-2

3.3	デザイナのインストール	3-2
3.4	デザイナの起動	3-2

4 コントリビュータの設定

4.1	コントリビュータについて	4-2
4.2	システム要件	4-2
4.3	コントリビュータの起動	4-2

5 インストールの考慮事項

5.1	Site Studio メタデータ・フィールド	5-2
5.1.1	Web サイト	5-2
5.1.2	Web Site Section	5-2
5.1.3	Web Site Object Type	5-2
5.1.4	Exclude From Lists	5-4
5.1.5	Region Definition	5-4
5.2	コントリビュータのデフォルト・ショートカット・キーの変更	5-5
5.3	消費サーバーのアクセス禁止	5-5
5.4	デフォルトのコントリビュータ・エディタの変更	5-6
5.5	カスタム要素の更新	5-6
5.6	認証検証アプレットの使用	5-6
5.7	シングル・サインオン (SSO) 環境の構成	5-8
5.8	コントリビュータのデバッグの有効化	5-8
5.9	10gR4 より前の Site Studio プロジェクトの使用	5-9

A Site Studio ソフトウェアのアンインストール

A.1	デザイナのアンインストール	A-2
A.2	Site Studio コンポーネントのアンインストール	A-2

B 7.5 より前の Web サイトのアップグレード

B.1	はじめに	B-2
B.2	自動アップグレードの処理内容	B-2
B.3	コンテンツ・サーバーのアップグレード	B-3
B.3.1	1つのコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード	B-3
B.3.2	複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード	B-3
B.3.3	完全アップグレードの実行	B-5
B.3.4	最小アップグレードの実行	B-6
B.4	その他の手順の手動実行	B-7
B.4.1	サイト・ナビゲーションの更新	B-7
B.4.2	コンテンツ・サーバー索引の再作成	B-7
B.4.3	カスタム・フラグメントの更新	B-7
B.4.3.1	<base> タグに依存するリンクの変更	B-8
B.4.3.2	SS_GET_PAGE の JavaScript による廃止されたリンクの変更	B-8
B.4.3.3	GET_SEARCH_RESULTS の更新	B-8
B.4.4	カスタム要素の更新	B-11
B.4.5	フォルダへの Web Site Section の割当て	B-11
B.4.6	JSP コードの更新	B-12

索引

はじめに

Site Studio のインストレーション・ガイドには、Site Studio 環境の設定を担当する管理者を支援する情報が記載されています。このガイドでは、導入情報、構成内容およびインストール手順について説明します。

対象読者

このドキュメントはシステム管理者を対象としています。Site Studio ソフトウェアのインストールおよび設定に特化した情報で構成されています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへ TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からの場合は、+1-407-458-2479 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、Oracle Site Studio ドキュメント・セットの次のドキュメントを参照してください (1-5 ページの「ドキュメント」も参照)。

- 『Oracle Site Studio コントリビュータ・ガイド』
- 『Oracle Site Studio デザイナ・ガイド』
- 『Oracle Site Studio 管理者およびマネージャ・ガイド』
- 『Oracle Site Studio リリース・ノート』

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック体	イタリック体は、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

1

概要

この項の内容は次のとおりです。

- 1-2 ページの「[Site Studio について](#)」
- 1-2 ページの「[システム要件](#)」
- 1-4 ページの「[インストール・プロセス](#)」
- 1-5 ページの「[ドキュメント](#)」

重要：10gR3 を含む以前のリリースと比較して、Site Studio 10gR4 ではアーキテクチャの主要な変更があります。新しいこのリリースでは、概念およびサイト・デザインのプロセスが全体的に変更されました。Site Studio 10gR4 リリースの新しいアーキテクチャおよび概念の概要については、『Site Studio デザイナ・ガイド』の最初のいくつかの章を参照してください。

1.1 Site Studio について

Site Studio は、エンタープライズ規模の Web サイトの包括的な設計、作成および管理を可能にする強力な柔軟な Web 開発アプリケーション・スイートです。Site Studio は、Web サイトの作成とコンテンツ管理が一体化されている点が、従来型の Web サイト開発ソリューションより優れています。すべてのサイト・アセット（テンプレート、グラフィック、CSS ファイルなど）およびすべてのサイト・コンテンツを含めた、Web サイトに関連するすべてのものが、コンテンツ・サーバーに格納され管理されます。Site Studio を使用すると生産性が大幅に向上し、組織はこれを使用して、精度が高く、時宜にかなった最新の Web コンテンツを、企業サイト全体を通して一貫性のあるブランドおよびプレゼンテーションで維持できます。Site Studio では、サイト・アーキテクチャおよびプレゼンテーションの制御を集中化する一方で、コンテンツ開発および継続して行われるメンテナンスをビジネス・ユニットまたはその他のチームに配分できます。

1.2 システム要件

Site Studio は、次のように 1 つの Content Server コンポーネントと 3 つのアプリケーションで構成されており、それぞれに独自のシステム要件があります。

- 1-2 ページの「[Content Server の要件](#)」
- 1-3 ページの「[デザイナー・アプリケーションの要件](#)」
- 1-3 ページの「[マネージャ・アプリケーションの要件](#)」
- 1-4 ページの「[コントリビュータ・アプリケーションの要件](#)」

1.2.1 Content Server の要件

Content Server

Site Studio 10gR4 は次の Content Server リリースで使用できます。

- **Content Server 10gR3:** 次のソフトウェア・コンポーネントとともに使用
 - SiteStudio コンポーネント
 - DBSearchContainsOpSupport コンポーネント（後述する索引付けに関する記述を参照）
 - CS10gR3CoreUpdate パッチ（CS 10gR3 リリース 10.1.3.3.2 以前のみ）
 - CS10gR3NativeUpdate パッチ（CS 10gR3 リリース 10.1.3.3.2 以前のみ）
- **Content Server 7.5.2:** 次のソフトウェア・コンポーネントとともに使用
 - SiteStudio コンポーネント
 - DBSearchContainsOpSupport コンポーネント（後述する索引付けに関する記述を参照）
 - CS752Update パッチ

SiteStudio コンポーネントは、Site Studio 10gR4 ディストリビューション・パッケージに含まれています。コンテンツ・サーバー・プロキシを使用してサイトを表示する予定がある場合は、Site Studio コンポーネントをコンテンツ・サーバー・プロキシおよび関連付けられたマスターの両方にインストールする必要があります。インストールされていない場合、サイトは正常に表示されません。

一般に、DBSearchContainsOpSupport コンポーネントは、Content Server ソフトウェアとともにインストールされます。そうではない場合、コンポーネントの ZIP ファイルを、Content Server ディストリビューション・パッケージの `¥packages¥allplatform` ディレクトリからインストールしてください。

必要な更新パッチの最新バージョンは、Oracle Metalink (<http://metalink.oracle.com>) から入手できます。

Content Server アドオン

Site Studio は次のような他の多くの Content Server アドオンとともに機能します。

- **Dynamic Converter** は、Web サイトで使用されるネイティブ・ドキュメントを、Web ブラウザで表示できるように HTML に変換します。
- **Check Out and Open** を使用すると、コントリビュータが Site Studio からコンテンツ・サーバーのネイティブ・ドキュメントをチェックアウトして、それらに関連付けられたサード・パーティ・アプリケーションで編集のために開くことができます。
- **Content Tracker および Content Tracker Reports** を使用すると、コントリビュータは、サイトのファイルの表示回数やファイルを表示したユーザーを示すサイト・レポートを確認できます。

どのアドオンを使用する場合も、コンポーネントのバージョンとコンテンツ・サーバーのバージョンに互換性がある必要があります。(これらのコンポーネントの詳細は、Content Server のドキュメントを参照してください。)

索引付け

コンテンツ・サーバーは全文索引付けまたはメタデータのみ索引付けに対応するように設定できます。ただし、DBSearchContainsOpSupport コンポーネントがコンテンツ・サーバーにインストールされている必要があります。このコンポーネントにより、重要な Site Studio メタデータ・フィールドの一部が正常に全文索引付けされます。これは、サイトが正常に機能するために必要です。

データベース検索および索引付け (全文またはメタデータのみ) を使用している場合、Site Studio コンポーネントをコンテンツ・サーバーにインストールまたはアップグレードする際に、検索索引を再作成する必要はありません。別の検索エンジン (通常は Verity) を使用している場合は、Site Studio コンポーネントをインストールまたはアップグレードする際に、検索索引を再作成する必要があります。詳細は、2-11 ページの「[コンテンツ・サーバー索引の再作成](#)」を参照してください。

Folders

Content Server の Folders 機能は Site Studio では必要ありません。ただし、Site Studio リリース 7.5 未満からアップグレードする場合は、フォルダベース・サイトからプロジェクトベース・サイトにアップグレードするために Folders 機能を有効にする必要があります。サイトをアップグレードした後でフォルダを無効にできます (Folders 機能に依存しない他のコンポーネントを使用しない場合)。アップグレード・プロセスの詳細は、[付録 B 「7.5 より前の Web サイトのアップグレード」](#)を参照してください。

サイトで引き続きフォルダを使用する場合は、追加するコンテンツがサイトの一部として認識されるように、異なるメタデータをフォルダに割り当てる必要があります。

1.2.2 デザイナ・アプリケーションの要件

Site Studio デザイナ・アプリケーションのシステム要件は次のとおりです。

- Microsoft Windows 2000、Windows XP または Windows Vista オペレーティング・システム
- Site Studio コンポーネントを実行しているコンテンツ・サーバーへのアクセス
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上 (作成した Web ページの表示には、Microsoft Internet Explorer 5.5 以上または Mozilla Firefox 1.0.7 以上を使用できます。)

1.2.3 マネージャ・アプリケーションの要件

Site Studio マネージャ・アプリケーションのシステム要件は次のとおりです。

- Site Studio コンポーネントを実行しているコンテンツ・サーバーへのアクセス
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上または Mozilla Firefox 1.0.7 以上

1.2.4 コントリビュータ・アプリケーションの要件

Site Studio コントリビュータ・アプリケーションのシステム要件は次のとおりです。

- Internet Explorer 6.0 以上または Firefox 2.0 以上を実行可能なオペレーティング・システム (例 : Microsoft Windows 2000、Windows XP、Windows Vista、Linux、Mac OS X)。
- Site Studio コンポーネントを実行しているコンテンツ・サーバーへのアクセス。
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以上または Firefox 2.0 以上。作成した Web ページを表示するには、Microsoft Internet Explorer 5.5 以上または Mozilla Firefox 1.0.7 以上が必要です。
- Java Virtual Machine (JVM) 1.5 (デフォルトではない Ephox をエディタとして使用する場合のみ) コントリビュータが、FCKeditor (デフォルト) を使用するように設定されている場合、JVM は必要ありません。

1.3 インストール・プロセス

Site Studio をインストールおよび設定する手順は次のとおりです。

1. Content Server が正常に実行されており、必要に応じてすべての必要なパッチを使用して更新されていることを確認します。1-2 ページの「[Content Server の要件](#)」を参照してください。
2. DBSearchContainsOpSupport コンポーネントがコンテンツ・サーバーにインストールおよび有効化されていることを確認します。手順は、Content Server のインストール・ドキュメントを参照してください。
3. Site Studio コンポーネントをアップロードしてコンテンツ・サーバー上で有効にします。詳細は、[第 2 章「Site Studio コンポーネントのインストール」](#)を参照してください。
4. Web サイトの作成と設計に使用するシステムにデザイナー・アプリケーションをインストールします。詳細は、[第 3 章「デザイナーのインストール」](#)を参照してください。

すべてを同じシステムにインストールすることもできますが、コンテンツ・サーバー（およびコンポーネント）のために専用サーバーを 1 つ使用し、設計または投稿用、あるいはその両方に複数のシステムを使用することをお勧めします。

インストール後の作業と考慮事項の詳細は、[第 5 章「インストールの考慮事項」](#)を参照してください。

1.4 ドキュメント

Oracle Site Studio 10gR4 に関して、次のドキュメントを入手できます。

ドキュメント	入手方法
リリース・ノート	Site Studio ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの PDF ファイル。
インストール・ガイド	デザイナのインストール・ディレクトリの Documentation フォルダ、および Site Studio ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの PDF ファイル。
デザイナ・ガイド	Site Studio デザイナ・アプリケーションの「 Help 」メニューおよび「 Help 」ダイアログ・ボタン。 デザイナのインストール・ディレクトリの Documentation フォルダ、および Site Studio ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの PDF (ドキュメントの印刷に便利)。
管理者およびマネージャ・ガイド	Site Studio マネージャ・アプリケーションの「 Help 」リンクおよび Site Studio 管理者ページ (Content Server ユーザー・インタフェース内)。 デザイナのインストール・ディレクトリの Documentation フォルダ、および Site Studio ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの PDF (ドキュメントの印刷に便利)。
コントリビュータ・ガイド	Site Studio コントリビュータ・アプリケーションの「 Help 」リンク。 デザイナのインストール・ディレクトリの Documentation フォルダ、および Site Studio ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの PDF (ドキュメントの印刷に便利)。

Site Studio コンポーネントのインストール

Site Studio コンポーネントはコンテンツ・サーバーにインストールします。このプロセスは次のとおりです。

- 2-2 ページの「インストール前の作業と考慮事項」
- 2-2 ページの「以前のコンポーネントのアンインストール」
- 2-3 ページの「新しいコンポーネントのインストールと有効化」
- 2-4 ページの「インストール後の作業と考慮事項」
- 2-11 ページの「コンテンツ・サーバー索引の再作成」
- 2-11 ページの「Web サーバーの再起動」

2.1 インストール前の作業と考慮事項

Site Studio コンポーネントをインストールする前に、次のことを確認してください。

- Site Studio ディストリビューション・パッケージが、使用するハード・ドライブの一時的な場所に解凍されていること。
- コンテンツ・サーバーが Site Studio 10gR4 のシステム要件をすべて満たしていること。詳細は、1-2 ページの「[Content Server の要件](#)」を参照してください。
- 必要なソフトウェア・パッチがコンテンツ・サーバーにインストールされていること。詳細は、1-2 ページの「[Content Server の要件](#)」を参照してください。
- DBSearchContainsOpSupport コンポーネントがコンテンツ・サーバーにインストールおよび有効化されていること。手順は、Content Server のインストールレーション・ドキュメントを参照してください。
- 以前のバージョンの Site Studio からアップグレードする場合は、以前のコンポーネントがアンインストールされていること。詳細は、次の「[以前のコンポーネントのアンインストール](#)」を参照してください。

2.2 以前のコンポーネントのアンインストール

以前のバージョンの Site Studio からアップグレードする場合は、新しいコンポーネントをインストールする前に、以前のコンポーネントをアンインストールする必要があります。

1. 新しいブラウザ・ウィンドウを開き、システム管理者 (sysmanager ロール) として Content Server にログインします。
2. 「Administration Applets」ページに移動して、「Admin Server」リンクをクリックします。
3. 「Content Admin Server」ページで、Site Studio コンポーネントをアンインストールするコンテンツ・サーバー・インスタンスのボタンをクリックします。
コンテンツ・サーバー・インスタンスのステータス・ページが表示されます。
4. サーバー・インスタンスのオプション・リストで、「Component Manager」リンクをクリックします。
「Component Manager」ページが表示されます。
5. 「Enabled Components」の下で「SiteStudio」を選択します。
6. 「Disable」をクリックします。
Site Studio コンポーネントが、無効化されたコンポーネントのリストに移動されます。
7. コンテンツ・サーバーを再起動します。
8. 「Uninstall Components」の下で「SiteStudio」を選択します。
9. 「Uninstall」をクリックします。
10. コンテンツ・サーバーを再起動します。

2.3 新しいコンポーネントのインストールと有効化

Site Studio コンポーネントをインストールして有効化するには、次のようにします。

1. 新しいブラウザ・ウィンドウを開き、システム管理者（sysmanager ロール）として Content Server にログインします。
2. 「Administration Applets」 ページに移動して、「Admin Server」 リンクをクリックします。
3. 「Content Admin Server」 ページで、Site Studio コンポーネントをインストールするコンテンツ・サーバー・インスタンスのボタンをクリックします。
選択したコンテンツ・サーバー・インスタンスのステータス・ページが表示されます。
4. サーバー・インスタンスのオプション・リストで、「Component Manager」 リンクをクリックします。
「Component Manager」 ページが表示されます。
5. 「Install New Component」 フィールドの横の「Browse」 ボタンをクリックします。
6. ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの Component ディレクトリにある Site Studio コンポーネントの zip ファイルにナビゲートして、ファイルを選択し、ファイル選択ダイアログを閉じます。
7. 「Install」 をクリックします。
概要ページにインストールされるアイテムのリストが表示されます。
8. 「Continue」 をクリックします。
「Install Settings」 ページが表示されます。
9. フラグメント・ライブラリ、カスタム要素フォーム、検証スクリプト、サンプル Web サイト・オブジェクト、およびカスタム構成スクリプトについてコンテンツ・タイプを選択します。
10. Web サイトのセクションの名前に使用する初期値を入力します。この値は、Web サイトのノード（セクション）に一意の ID を作成するために使用されます。1つのコンテンツ・サーバーにコンポーネントをインストールする場合は、デフォルトを使用することができます。複数のコンテンツ・サーバーにコンポーネントをインストールする場合は、格納されるサーバーごとに Web サイトを区別するために、異なる初期値を使用することをお勧めします。
11. 「Continue」 をクリックします。
これで必要なすべてのファイルがアップロードされてインストールされます。
特にネットワーク・ドライブにインストールしている場合は、アップロードにしばらく時間がかかることがあります。進捗状況の表示はありません。
すべてのファイルがコピーされると、コンポーネントがアップロードされて正常にインストールされたことを知らせるメッセージが表示されます。
12. リンクをクリックしてコンポーネントを有効化し、サーバーを再起動します。
コンテンツ・サーバーのステータス・ページが表示されます。
13. 再起動アイコン（図 2-1）をクリックしてコンテンツ・サーバー・インスタンスを再起動します。

図 2-1 再起動アイコン



Site Studio の実行に必要なすべてのフラグメントとサンプル・ファイルは、インストール時にコンテンツ・サーバーに自動的にチェックインされます。Site Studio 固有の新しいメタデータ・フィールドもコンテンツ・サーバーに追加されます。

コンテンツ・サーバープロキシを使用してサイトを表示する予定がある場合は、コンテンツ・サーバーのマスター・インスタンスにもコンポーネントをインストールする必要があります。

2.4 インストール後の作業と考慮事項

新しい Site Studio コンポーネントをインストールした後で、次に示すインストール後の作業と考慮事項に注意する必要があります。

- デフォルトのプロジェクト・ドキュメント情報の設定を確認します。これは、プロジェクトベースの階層が機能するために必要です。詳細は、2-5 ページの「[デフォルトのプロジェクト・ドキュメント情報の設定](#)」を参照してください。
- Apache を Web サーバーとして使用する場合は、Site Studio がパスベースの URL を処理できるようにサーバーを構成する必要があります。詳細は、2-5 ページの「[Apache Web サーバーの構成](#)」を参照してください。
- Sun ONE を Web サーバーとして使用する場合は、Web ID を NameTrans 構成エントリに含めるようにサーバーを構成する必要があります。詳細は、2-6 ページの「[Sun ONE Web サーバーの構成](#)」を参照してください。
- 場合によっては SSUrlMapPlugin ファイルを更新する必要があります。Site Studio コンポーネントのインストール時に SSUrlMapPlugin ファイルが置き換えられますが、特定の状況ではこのファイルを手動で更新する必要があります。詳細は、2-7 ページの「[SSUrlMapPlugin ファイルの更新](#)」を参照してください。
- Site Studio の一部のメタデータ・フィールドをゾーン・フィールドに指定し、それらを全文検索できるようにする必要があります。詳細は、2-7 ページの「[ゾーン・フィールドの構成](#)」を参照してください。
- JavaServer Pages (JSP) を Site Studio で使用する場合は、コンテンツ・サーバーで JSP を有効にする必要があります。詳細は、2-8 ページの「[コンテンツ・サーバーでの JavaServer Pages の有効化](#)」を参照してください。
- Active Server Pages (ASP) を Site Studio で使用する場合は、ASP のサポートを IIS で有効にし、相対パスを使用するようにサーバーを構成する必要があります。詳細は、2-9 ページの「[コンテンツ・サーバーでの Active Server Pages の構成](#)」(クラスタ化されていないコンテンツ・サーバー環境) または 2-9 ページの「[クラスタ化コンテンツ・サーバー環境での Active Server Pages の構成](#)」(クラスタ化環境) を参照してください。

重要: JSP および ASP は、10gR4 より前のアーキテクチャを使用するプロジェクトである、レガシー Site Studio プロジェクトでのみサポートされています。これらは、通常、10gR4 より前の Site Studio リリースで作成され、Designer 10gR4 で開くプロジェクトです。

- Site Studio を 7.5 より前のリリースからアップグレードしている場合は、以前のバージョンで作成したすべての Web サイトをアップグレードする必要があります。詳細は、付録 B 「[7.5 より前の Web サイトのアップグレード](#)」を参照してください。
- リリース 7.5 または 10gR3 からアップグレードしている場合は、サイト・ナビゲーションを更新する必要があります。これは、Site Studio デザイナ・アプリケーションと、Content Server の「[Manage Web Sites](#)」ページで行うことができます。

重要: Site Studio を設定したら Web サーバーを再起動してください。

2.4.1 デフォルトのプロジェクト・ドキュメント情報の設定

Site Studio で新しい Web サイトを作成すると、自動的に新しいプロジェクト・ファイルが作成され、コンテンツ・サーバーにチェックインされます。このため、Web サイトを作成する前に、新しいプロジェクト・ファイルに割り当てるメタデータを指定する必要があります。これは、コンテンツ・サーバーの「Set Project Default Document Information」ページで行います。

Site Studio のプロジェクト・ファイルで使用されるデフォルト・メタデータを設定するには、次のようにします。

1. 管理者としてコンテンツ・サーバーにログオンします。
2. 「Administration」ページに移動し、「Site Studio Administration」をクリックします。
「Site Studio Administration」ページが表示されます。
3. 「Set Default Project Document Information」をクリックします。
「Set Default Project Document Information」ページが表示されます。ここで、Site Studio で生成される新しいプロジェクトのためのデフォルト・メタデータを割り当てます。
4. 必要に応じてメタデータを設定し、終了したら「Update」をクリックします。
これで「Site Studio Administration」ページに戻ります。

2.4.2 Apache Web サーバーの構成

Apache Web サーバーを Web サーバーとして使用する場合は、パスベースの URL を Site Studio で利用できるように構成ファイルを更新する必要があります。Apache を Web サーバーとして使用しない場合、この項は必要ありません。

Apache Web サーバーの構成ファイルを編集するには、次のようにします。

1. Apache の httpd.conf 構成ファイルを開きます。これは、Apache をインストールした場所の conf ディレクトリにあります。
2. 次のようなエントリを検索します。

```
LoadModule IdcApacheAuth [CS-Dir]/shared/os/[OS_Name]/lib/IdcApacheAuth2.dll
IdcUserDB myserver [CS-Dir]/data/users/userdb.txt
Alias /myserver "[CS-Dir]/weblayout"
<Location "/myserver">
    DirectoryIndex portal.htm
    IdcSecurity myserver
</Location>
```

注意： UNIX では LoadModule 行は IdcApacheAuth2.so を参照しています。

3. 次の行を追加します。

```
<Location "/">
    IdcSecurity myserver
</Location>
```
4. 次に、UseCanonicalName 構成変数を検索して、**Off** に設定されていることを確認します。
5. 構成ファイルを保存して、Apache HTTP サーバーを再起動します。

注意

- すべての手順において、Content Server インスタンスの名前は **myserver** としています。Content Server に別の名前を付けている場合は、インスタンス名が変わります。たとえば、Content Server の名前が **cherokee** の場合、手順 3 は次のようになります。

```
<Location "/">
    IdcSecurity cherokee
</Location>
```

すべてのコード例で Content Server の名前として **myserver** を使用しています。

- Site Studio のドメインに基づくサイトを使用する場合は、`<Location"/>` エントリ（手順 3）を使用する必要があります。
- `<Location "/">` エントリ（手順 3）を使用しない場合は、サーバーが認識する必要のある Web サイトごとに個別のエントリを使用する必要があります。たとえば、2 つのサイトがあり、アドレスがそれぞれ `http://<domain>/site1/index.htm` と `http://<domain>/site2/index.htm` の場合は、次のように 2 つの Location エントリを設定できます。

```
<Location "/site1">
    IdcSecurity myservers
</Location>
<Location "/site2">
    IdcSecurity myservers
</Location>
```

Site Studio での Web サイト URL の変更の詳細は、『Site Studio デザイナ・ガイド』を参照してください。

2.4.3 Sun ONE Web サーバーの構成

Sun ONE Web サーバーを Web サーバーとして使用する場合は、パスベースの URL を Site Studio で利用できるように構成ファイルを更新する必要があります。Sun ONE を Web サーバーとして使用しない場合、この項は必要ありません。

Sun ONE Web サーバーの構成ファイルを編集するには、次のようにします。

1. Sun Web サーバーのソフトウェア・ディレクトリに移動し、`https-[host_name]/config` サブディレクトリ（`[host_name]` はソフトウェアがインストールされているシステムの名前）を開きます。次に例を示します。

```
/https-server7/config
```

2. ファイル `obj.conf` をテキスト・エディタで開きます。
3. `<Object name="default">` セクションで、次のように Web ID を NameTrans エントリに追加します。

```
NameTrans fn="pfx2dir" from="/[Site_ID]" dir="[Weblayout_Dir]"
```

このとき、`[Site_ID]` は Web サイトの Web ID（たとえば `/Xalco`）、`[Weblayout_Dir]` は Web で表示可能なファイルのリポジトリ（たとえば、`/ul/cserver/idcm1/weblayout`）です。

4. `obj.conf` ファイルで変更した内容を、Web サーバーの管理ページで適用します。
5. Web サーバーを停止して再起動します。

2.4.4 SSUrlMapPlugin ファイルの更新

SSUrlMapPlugin は、Site Studio URL をマップするために使用される Web フィルタ・プラグインです。このファイルはコンポーネントのインストール時に自動的に更新されます。ただし、Microsoft Internet Information Server (IIS) を使用する際に、以前のバージョンの Site Studio からアップグレードしている場合は、このファイルを手動で更新する必要があります。通常、このファイルは、上書きできないように Microsoft IIS によってロックされています。

SSUrlMapPlugin ファイルを手動でインストールするには、次のようにします。

1. コンテンツ・サーバーと Web サーバーを停止します。
2. `[CS_Dir]\%custom%\SiteStudio\support\win32\SSUrlMapPlugin.dll` ファイルを `[CS_Dir]\%shared%\os\win32\lib\` ディレクトリにコピーします。
3. コンテンツ・サーバーと Web サーバーを起動します。

重要： コンテンツ・サーバーは、World Wide Web Publishing サービスよりも前に起動する必要があります。

注意： クラスタ環境に Site Studio をインストールするときは、クラスタ内の各サーバーでも SSUrlMapPlugin ファイルを手動で更新する必要があります。

2.4.5 ゾーン・フィールドの構成

Site Studio コンポーネントをインストールすると、いくつかのメタデータ・フィールドがコンテンツ・サーバーに追加されます。このうち一部のフィールドを、全文索引に対応できるようにゾーン・フィールドとして構成する必要があります。

DBSearchContainsOpSupport コンポーネントがコンテンツ・サーバーにインストールおよび有効化されていることを確認します。このコンポーネントにより、ゾーン・フィールドが正常に全文索引付けされます。これは、Site Studio が正常に機能するために必要です。このコンポーネントがインストールおよび有効化されていない場合、インストールして有効化する必要があります。コンポーネント zip ファイルは、Content Server ディストリビューション・パッケージの `%packages%\allplatform` ディレクトリにあります。詳細および手順は、Content Server のインストール・ドキュメントを参照してください。

Site Studio のメタデータ・フィールドのゾーン・フィールドとしての構成

Site Studio のメタデータ・フィールドをゾーン・フィールドとして構成するには、次のようにします。

1. Content Server に管理者としてログインします。
2. コンテンツ・サーバーの「Administration」ページを開きます。
3. 「Zone Fields Configuration」をクリックします。
4. ゾーン・テキスト・フィールドとして「Web Sites」と「Exclude From Lists」を指定します。

これらのフィールドをゾーン・フィールドとして有効にした後で、検索索引を再作成する必要はありません。

Content Server 構成ファイルへの設定の追加

Content Server の構成ファイルに設定を追加するには、次のようにします。

1. 新しいブラウザ・ウィンドウを開き、システム管理者 (sysmanager ロール) として Content Server にログインします。
2. 「Administration Applets」ページに移動して、「Admin Server」リンクをクリックします。

3. 「Content Admin Server」 ページで、該当するコンテンツ・サーバー・インスタンスのボタンをクリックします。
選択したコンテンツ・サーバー・インスタンスのステータス・ページが表示されます。
4. サーバー・インスタンスのオプション・リストで、「General Configuration」 リンクをクリックします。
「General Configuration」 ページが表示されます。
5. ページの一番下までスクロールし、次の行を「Additional Configuration Variables」 ボックスに追加します。
`SSUseUniversalQueryFormat=1`
6. 次の行を追加することもできます (オプション)。
`SSEnableDBSearchShortcut=1`
これにより、Site Studio デザインおよびコントリビュータで実行される問合せのレスポンスが向上します。
7. 「Save」 をクリックします。
8. コンテンツ・サーバーを再起動します。

2.4.6 コンテンツ・サーバーでの JavaServer Pages の有効化

JavaServer Pages を Site Studio で使用する予定がある場合は、コンテンツ・サーバーで JSP を有効にする必要があります。これにより、コンテンツ・サーバー上のコンテンツやサービス (個人情報、セキュリティ定義、定義済変数など) にアクセスして変更できるようになります。JavaServer Pages の有効化の詳細は、Content Server ドキュメント・セットに含まれる『Getting Started With the Software Developer's Kit (SDK) guide』を参照してください。

Site Studio コンポーネントを有効化した後で JSP グループを有効化する場合は、JSP フラグメントが正常に機能するように JSP サポートを構成する必要があります。

重要: JSP は、10gR4 より前のアーキテクチャを使用するプロジェクトである、レガシー Site Studio プロジェクトでのみサポートされています。これらは、通常、10gR4 より前の Site Studio リリースで作成され、Designer 10gR4 で開くプロジェクトです。

新しい JSP グループのための JSP サポートの構成

Site Studio コンポーネントをインストールしてから、コンテンツ・サーバーの JSP 対応グループのリストにグループを追加した場合、Site Studio の JSP フラグメントが正常に機能するには、そのグループのために JSP サポート・ファイルを再デプロイする必要があります。

JSP サポートを構成するには、次のようにします。

1. Content Server に管理者としてログオンします。
2. 「Administration」 の下の 「Site Studio Administration」 をクリックします。
3. 「Manage Fragment Libraries」 をクリックします。
4. 「Configure JSP Support」 ボタンをクリックします。

JSP サポート・ファイルが、コンテンツ・サーバーの必要なディレクトリに抽出されます。

2.4.7 コンテンツ・サーバーでの Active Server Pages の構成

ASP サイトを Site Studio で作成する予定がある場合は、StudioStudio コンポーネントをインストールした後で次の作業を行う必要があります。

重要: ASP は、10gR4 より前のアーキテクチャを使用するプロジェクトである、レガシー Site Studio プロジェクトでのみサポートされています。これらは、通常、10gR4 より前の Site Studio リリースで作成され、Designer 10gR4 で開くプロジェクトです。

- IdcCommandUX コンポーネント (バージョン 7.0.0.7 以上) をコンテンツ・サーバーにインストールします。コンポーネント zip ファイルは、Content Server ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの %extras ディレクトリにあります。
- Microsoft Windows Server 2003 を使用する場合は、ASP サポートを有効にし、Site Studio が親パス (. . %websites% など) を使用できるようにサーバーを構成します。(詳細は、Microsoft Internet Information Server ヘルプで「親パス」に関連するドキュメントを参照してください。)
- Microsoft Internet Information Server (IIS) の Websites フォルダで、スクリプトを実行してアプリケーション・オブジェクトを作成できるようにします。これを実行するには、次のようにします。
 1. 「コントロールパネル」で「管理ツール」を開き、「Internet Information Services」を開きます。
 2. Websites フォルダを右クリックし、「Properties」を選択します。
 3. 「Websites Properties」ダイアログ・ボックスの「Home Directory」タブで、「Execute Permissions」リストから「Scripts only」を選択します。
 4. 「Application name」テキスト・ボックスに websites と入力します。
 5. 「Apply」をクリックして「OK」をクリックします。
 6. IIS を再起動します。

2.4.8 クラスタ化コンテンツ・サーバー環境での Active Server Pages の構成

クラスタ化されていないコンテンツ・サーバー・インストールでは、ASP コードは、%weblayout%websites フォルダの global.asa ファイル内の変数を使用して、通信するコンテンツ・サーバー・プロセスを識別します。クラスタ化環境では、クラスタ内の各 Web サーバーは、同じサーバーで実行しているコンテンツ・サーバー・プロセスと通信します。ロード・バランサの仮想 IP アドレスを介して通信を再ルーティングすることはありません。この場合、共有の global.asa ファイルは適切ではありません。クラスタの各 Web サーバーが独自の global.asa ファイルを使用するように設定する必要があります。

重要: ASP は、10gR4 より前のアーキテクチャを使用するプロジェクトである、レガシー Site Studio プロジェクトでのみサポートされています。これらは、通常、10gR4 より前の Site Studio リリースで作成され、Designer 10gR4 で開くプロジェクトです。

クラスタ化コンテンツ・サーバー環境の Site Studio サイトで Active Server Pages を使用する予定がある場合は、コンポーネントをインストールした後で次の作業を行う必要があります。

1. クラスタの各 Web サーバーで、次のようにします。
 - IdcCommandUX コンポーネント (バージョン 7.0.0.7 以上) をコンテンツ・サーバーにインストールします。コンポーネント zip ファイルは、Content Server ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージの %extras ディレクトリにあります。

- Microsoft Windows Server 2003 を使用する場合は、クラスタの各 Web サーバーで ASP サポートを有効にし、Site Studio が相対パス (..`¥websites¥` など) を使用できるようにサーバーを構成します。(詳細は、Microsoft Internet Information Server ヘルプで「親パス」に関連するドキュメントを参照してください。)
 - Microsoft Internet Information Server (IIS) の Websites フォルダまたはルート Web レイアウト・フォルダ (たとえば `idcm1`) に対して作成されたアプリケーション・オブジェクトがあれば削除し、ルート Web サーバーのアプリケーション・オブジェクトのみを残します。
2. クラスタの各 Web サーバーで、ルート Web サーバー・ディレクトリ (通常は `c:¥inetpub¥wwwroot`) にある `global.asa` ファイルを更新します。必要であればファイルを作成し、ファイルに次のメソッドが含まれるようにします。

```
<SCRIPT LANGUAGE=vbscript runat=server>
Sub Application_OnStart
Application("ssIdcReference") = "socket:SERVER:4444"
Application("ssIdcWebRoot") = "http://SERVER/idcm1/"
End Sub
</SCRIPT>
```

このスクリプトをクラスタの各 Web サーバーについて次のように変更します。

- SERVER を置き換える語は、クラスタ・ノードのインストール・プロセスで `ClusterNodeAddress` に値を指定したかどうかによって異なります。
- `ClusterNodeAddress` の値がある場合は、SERVER を置き換えるために同じ値が必要です。
- `ClusterNodeAddress` の値がない場合は、ノード (通常は `127.0.0.1` すなわち `localhost`) を示す任意の値で SERVER を置き換えることができます。システムの名前や IP アドレスを使用することもできます。
- 例: `ClusterNodeAddress=10.20.30.40` と設定した場合 (デフォルト・ポート `4444` を使用、相対 Web ルートが `idcm1`)

このとき `global.asa` ファイルは次のようになります。

```
<SCRIPT LANGUAGE=vbscript runat=server>
Sub Application_OnStart
Application("ssIdcReference") = "socket:10.20.30.40:4444"
Application("ssIdcWebRoot") = "http://10.20.30.40/idcm1/"
End Sub
</SCRIPT>
```

- `ClusterNodeAddress` を設定しない場合、`global.asa` は次のようになります。

```
<SCRIPT LANGUAGE=vbscript runat=server>
Sub Application_OnStart
Application("ssIdcReference") = "socket:127.0.0.1:4444"
Application("ssIdcWebRoot") = "http://127.0.0.1/idcm1/"
End Sub </SCRIPT>
```

- 必要であれば `idcm1` をインスタンス名で置き換えます。
 - 必要であれば `4444` を特定のポート番号で置き換えます。
3. IIS を再起動します。

2.5 コンテンツ・サーバー索引の再作成

データベース検索および索引付け（全文またはメタデータのみ）を使用している場合、Site Studio コンポーネントをコンテンツ・サーバーにインストールまたはアップグレードする際に、検索索引を再作成する必要はありません。別の検索エンジン（通常は Verity）を使用している場合は、Site Studio コンポーネントをインストールまたはアップグレードする際に、検索索引を再作成する必要があります。コンポーネントを有効にし、コンテンツ・サーバーを構成してから、検索索引を再作成します。

索引の再作成は、Site Studio によって導入された新しいメタデータ・フィールドを利用するために必要です。

重要： 検索索引の再作成は、Content Server インスタンスで管理するコンテンツ・アイテムの数によっては、非常に時間のかかるプロセスになる場合があります。そのため、再作成は Content Server の使用がオフピークである時間（通常は夜間または週末）に実行することをお勧めします。

リリース 7.5 より前のリリースの Site Studio で作成された Web サイトをアップグレードする予定がある場合は（付録 B 「7.5 より前の Web サイトのアップグレード」を参照）、アップグレード時にコンテンツ・サーバーで検索索引を再作成する必要があります。このため、索引の再作成を繰り返さずにすむように、サイトのアップグレードが完了してからこの手順を行うことをお勧めします。

索引の再作成の詳細は、Content Server 管理のドキュメントを参照してください。

2.6 Web サーバーの再起動

Site Studio を設定したら Web サーバーを再起動してください。再起動しないと、Site Studio のすべての Web サイトにアクセスできなくなります。

デザイナーのインストール

Site Studio デザイナは、ユーザーが Web サイトを設計、作成および管理できる開発環境を提供するアプリケーションです。

この項の内容は次のとおりです。

- 3-2 ページの「[デザイナーについて](#)」
- 3-2 ページの「[システム要件](#)」
- 3-2 ページの「[デザイナーのインストール](#)」
- 3-2 ページの「[デザイナーの起動](#)」

3.1 デザイナーについて

Site Studio デザイナーは、単一のユーザー（サイト・デザイナー）が Site Studio Web サイトを作成、設計、管理および配布できる開発環境を提供します。デザイナーは、通常、Web マスター、Web 開発者、サイト管理者またはそれと同等の役割を持つ人物です。

デザイナーでサイトが作成されると、そのサイトは、Web サイト・コンテンツを作成および管理できるサイト管理者およびコントリビュータに渡されます。通常、1人のデザイナーは、複数の管理者およびコントリビュータと作業します。

3.2 システム要件

Site Studio デザイナー・アプリケーションのシステム要件は次のとおりです。

- Microsoft Windows 2000、Windows XP または Windows Vista オペレーティング・システム
- Site Studio コンポーネントを実行しているコンテンツ・サーバーへのアクセス
- Microsoft Internet Explorer 5.5 以上（作成した Web ページの表示には、Microsoft Internet Explorer 5.5 以上または Mozilla Firefox 1.0.7 以上を使用できます。）

3.3 デザイナーのインストール

Site Studio デザイナー・アプリケーションをインストールするには、次のようにします。

注意： Site Studio デザイナーをインストールするにはコンピュータの管理権限が必要です。ユーザー・アカウント・コントロール (UAC) をオフにした Windows Vista が動作しているシステムに Site Studio デザイナーをインストールする場合、アプリケーションのインストールは、必ず管理者権限を持つユーザーで行ってください。

1. Web サイトの作成と管理に使用するコンピュータで、Site Studio ソフトウェア・ディストリビューション・パッケージを開きます。
2. **Designer** フォルダを開きます。
3. **Setup.exe** を起動してから、画面上の指示に従います。

注意： 以前のバージョンのデザイナーがインストールされているコンピュータに Site Studio デザイナー 10gR4 をインストールする場合、デザイナー 10gR4 アプリケーションは、以前のバージョンと同時にインストールされます。（以前のバージョンは削除されません。）

3.4 デザイナーの起動

Site Studio デザイナー・ソフトウェアをインストールしたら、「スタート」ボタンから「プログラム」→「Oracle Universal Content Management」→「Site Studio 10gR4」→「Site Studio Designer」の順に選択して、アプリケーションを開くことができます。

デザイナーを最初に起動したときは、空のサイト作業領域が表示され、「Site Connection Manager」ダイアログ・ボックスがすでに開いています（最初の Web サイトへの接続を設定できます）。その後は、前回作業していた Web サイトが開きます（必要であればこの設定は変更できます）。

注意： Site Studio デザイナーの使用の詳細は、『Site Studio デザイナー・ガイド』を参照してください。

コントリビュータの設定

Site Studio コントリビュータは、コントリビュータに、Site Studio Web サイトのコンテンツを追加および編集するインコンテキスト編集環境を提供するアプリケーションです。

この項の内容は次のとおりです。

- 4-2 ページの「[コントリビュータについて](#)」
- 4-2 ページの「[システム要件](#)」
- 4-2 ページの「[コントリビュータの起動](#)」

4.1 コントリビュータについて

サイト・デザイナーにより、Web サイトの特定の領域がサイト・コントリビュータで使用できるようになります（コントリビューション・リージョン）。これにより、これらのコントリビューション・リージョン内のコンテンツを編集または更新できます。Site Studio コントリビュータには、Web サイトの Web ページを編集するための多くのオプションが用意されています。ワード・プロセッシング・アプリケーションと似た編集環境およびデスクトップ・エディタで一般に使用されるほとんどの機能が使用できます。テキストの記述、そのフォーマット化、画像の追加、表の作成その他の多くの作業ができます。

4.2 システム要件

Site Studio コントリビュータ・アプリケーションのシステム要件は次のとおりです。

- Internet Explorer 6.0 以上または Firefox 2.0 以上を実行可能なオペレーティング・システム（例：Microsoft Windows 2000、Windows XP、Windows Vista、Linux、Mac OS X）。
- Site Studio コンポーネントを実行しているコンテンツ・サーバーへのアクセス。
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以上または Firefox 2.0 以上。作成した Web ページを表示するには、Microsoft Internet Explorer 5.5 以上または Mozilla Firefox 1.0.7 以上が必要です。
- Java Virtual Machine (JVM) 1.5（デフォルトではない Ephox をエディタとして使用する場合のみ）コントリビュータで、FCKeditor（デフォルト）を使用するように設定されている場合、JVM は必要ありません。

4.3 コントリビュータの起動

Web ページのコントリビューション・リージョンでコンテキストを編集すると、コントリビュータ・アプリケーションが自動的に開きます。このため、多くのアプリケーションのように、実際にコントリビュータそのものを（デスクトップ、スタート・メニューなどから）起動することはありません。

コントリビュータが Web ページ上のコンテンツを編集または更新する最初の手順として、コントリビューション・モードでそのページを開きます。これには、Web ブラウザ内の Web ページを表示しながら、特別なショートカットを押します。デフォルトのショートカットは、[Ctrl]+[Shift]+[F5] ですが、サイト管理者は別の組合せを設定できます。

割り当てられたショートカットを押すと、Web サイトがあるコンテンツ・サーバーに接続するためのログイン資格証明（ユーザー名およびパスワード）を求められます。ログインすると、それぞれのコントリビューション・リージョン（編集可能な Web ページの領域）の隣に 1 つ以上のコントリビュータ画像が表示されたコントリビューション・モードでページが表示されます（図 4-1）。

図 4-1 コントリビューション画像



コントリビューション画像には、コントリビューション・リージョンの名前、編集アイコンおよびメニュー・アイコンが（左から右に）表示されます。コントリビューション・リージョンの上にマウス・カーソルを置くと、関連付けられたコントリビューション・リージョンが黄色いボックスでマークされます。これが、選択されたコントリビューション画像を使用して編集できるコンテンツです。

選択されたコントリビューション・リージョンを編集するには、編集アイコンをクリックするか、メニュー・アイコンをクリックして「Edit」オプションを選択します。コントリビュータ・エディタが新しいブラウザ・ウィンドウで開き、そのリージョンのコンテンツの編集を開始できます。コントリビュータ・エディタが開くと、元の Web ページを表示している Web ブラウザは一時的に使用できなくなる点に注意してください。コントリビュータ・エディタを閉じると、Web ブラウザに戻ることができます。

コントリビューション・データファイルの編集および保存が完了すると、Web サイトは自動的に更新され、変更が反映されます。

Site Studio コントリビュータの使用の詳細は、『Site Studio コントリビュータ・ガイド』を参照してください。

インストールの考慮事項

この項は、次のインストールの考慮事項で構成されています。

- 5-2 ページの「[Site Studio メタデータ・フィールド](#)」
- 5-5 ページの「[コントリビュータのデフォルト・ショートカット・キーの変更](#)」
- 5-5 ページの「[消費サーバーのアクセス禁止](#)」
- 5-6 ページの「[デフォルトのコントリビュータ・エディタの変更](#)」
- 5-6 ページの「[カスタム要素の更新](#)」
- 5-6 ページの「[認証検証アプレットの使用](#)」
- 5-8 ページの「[シングル・サインオン \(SSO\) 環境の構成](#)」
- 5-8 ページの「[コントリビュータのデバッグの有効化](#)」
- 5-9 ページの「[10gR4 より前の Site Studio プロジェクトの使用](#)」

5.1 Site Studio メタデータ・フィールド

Site Studio コンポーネントをインストールすると、次の 5 つのメタデータ・フィールドがコンテンツ・サーバーに追加されます。

- [Web サイト](#)
- [Web Site Section](#)
- [Web Site Object Type](#)
- [Exclude From Lists](#)
- [Region Definition](#)

5.1.1 Web サイト

Web Sites メタデータ・フィールド（実際の名前は xWebsites）には、コンテンツ・サーバーの特定のサイト・アセットが関連付けられた Web サイトのリストが含まれます。各 Web サイトには独自の ID があります。新しいアセットまたはコンテンツ・ファイルを Web サイトに追加するたびに、そのファイルに対する Web サイト ID がこのメタデータ・フィールドに自動的に追加されます。

Web Sites メタデータは、動的リスト表示と検索が正常に機能するために必要です。このメタデータを使用すると、特定のファイルが関連付けられているすべての Web サイトを簡単に表示することもできます。

Web Sites メタデータは、コンテンツの再利用に対応するように導入されました。WebsiteID メタデータ（以前のバージョンの Site Studio フラグメントのサポートを提供する非推奨のフィールド）にかわるものです。以前のバージョンの Site Studio をアップグレードするときは、コンテンツの再利用を予定していない場合でも、現在 WebsiteID 値を使用しているフラグメントをカスタマイズする必要があります。詳細は、B-7 ページの「[その他の手順の手動実行](#)」を参照してください。

5.1.2 Web Site Section

Web Site Section メタデータ・フィールド（実際の名前は xWebsiteSection）は、新しい Site Studio コンポーネントをサーバーにインストールすると自動的に値が移入されます。Web サイト・セクションは、Web サイトのどこにドキュメントが格納されるかを示します（ターゲット・セクションが元のハイパーリンクで明示的に指定されない場合）。

Web サイトの既存コンテンツ（以前のバージョンの Site Studio で作成）では、Web Site Section の値はコレクション ID の値から導出されます。（コレクション ID は、Site Studio では使用されなくなった Folders コンポーネントに含まれていました。）これらはすべて、サイトをアップグレードしたときに自動的に処理されます。詳細は、B-3 ページの「[1 つのコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード](#)」を参照してください。

サイトのアップグレードが完了したら、フォルダのかわりに Web Site Section の使用を開始できます。継続してフォルダを使用する場合は、B-11 ページの「[フォルダへの Web Site Section の割当て](#)」の手順を参照してください。

5.1.3 Web Site Object Type

Web Site Object Type メタデータ（実際の名前は xWebsiteObjectType）は、コンテンツ・サーバーで Site Studio コンポーネントを有効にすると自動的に追加されます。各メタデータ値は、Site Studio で使用できるサイト・アセットのタイプを表します。

- **データファイル**：Site Studio により生成される XML フォーマットのコンテンツ・ファイル。コントリビュータ・データファイルは、Site Studio コントリビュータ・アプリケーションを使用して編集されます。
- **ネイティブ・ドキュメント**：Microsoft Word などの一般的なサード・パーティ・アプリケーションを使用して作成されるコンテンツ・ファイル。ネイティブ・ドキュメントは、Dynamic Converter を使用して HTML フォーマットに変換され、関連するアプリケーションを使用して編集されます。

- **フラグメント**: Site Studio Web サイトの機能を拡張する (たとえば、動的ナビゲーション支援または標準ページ・フッターの提供) コードのチャンク。
- **イメージ**: コンテンツ・ファイルまたはページ・テンプレート (たとえば、企業バナーや製品イメージ) に含まれているグラフィック・ファイル (JPG、GIF、PNG)。
- **スクリプト**: ユーザーが操作しなくても実行可能な一連のコマンドを提供する JavaScript ファイル。スクリプトは、Web ページへの追加機能の提供のために使用されることがよくあります。
- **スタイル・シート**: ページ・コンテンツの表示方法 (特に、ヘッダーやリンクなどの異なる HTML 要素がどのように表示されるか) を制御する Cascading style sheet (CSS) ファイル。CSS ファイルへのリンクはページ・テンプレートに埋め込まれている場合が多く、そのフォーマット・ルールはこれらのテンプレートに基づくすべての Web ページに適用されます。
- **プロジェクト**: サイト階層、サイト・セクション・プロパティ、データの関連性、プレースホルダ・マッピングなど、デザイナを使用してサイトを処理するために必要な、Site Studio Web サイトのすべての情報を格納する XML ファイル。
- **カスタム要素フォーム**: 要素内で使用するカスタム・フォーム (たとえば、特定のファイル・タイプの選択フォーム) を定義する HTML ファイル。Site Studio には、事前定義されたカスタム要素フォームがいくつか用意されています (`{CS-Dir}\custom\SiteStudio\elementforms`)。
- **カスタム構成スクリプト**: デフォルトのコントリビュータ・エディタ構成を上書きし、コントリビュータにカスタマイズされた編集エクスペリエンスを提供する JavaScript ファイル。
- **検証スクリプト**: データが要件 (たとえば、データが指定された最大長を超えていない、無効な文字を含んでいないなど) を満たしているか判断するための、要素データの検証ルールを定義する JavaScript ファイル。
- **マネージャ設定**: Site Studio マネージャで使用できる機能を定義するファイル。マネージャは Web ベースのツールで、これを使用して指定されたユーザー (サイト・マネージャ) は Web サイトの構造を変更できます。
- **ページ・テンプレート**: Web ページのレイアウトおよび高度なルック・アンド・フィールを定義する完全にフォーム化された HTML ファイル。コントリビューション・リージョンの配置 (たとえば、ページの編集可能領域)、ナビゲーション支援 (フラグメントの形態) およびサイト全体のイメージ (バナーおよびリンク) などが含まれます。ページ・テンプレートは最高位のサイト・デザイン・オブジェクトです。
- **サブテンプレート**: ページ・テンプレート上のプレースホルダに挿入して、独自のプレースホルダおよびコントリビューション・リージョンを持つ、より小さく再使用可能な領域に分割する、部分的な HTML ファイル (たとえば、ヘッドおよび本体セクションがない)。
- **リージョン・テンプレート**: Web ページのコントリビューション・リージョン内にあるデータのレイアウトおよびルック・アンド・フィールを定義する部分的な HTML ファイル (たとえば、ヘッドおよび本体セクションがない)。
- **プレースホルダ定義**: 関連付けられたプレースホルダに対して、リージョン定義、リージョン・テンプレートおよびサブテンプレートに可能なことを定義するファイル。これらは、プレースホルダに対して可能なコントリビュータ・アクションも指定します。
- **リージョン定義**: 要素の特定のタイプを構成するコンテンツ・タイプを定義するファイル。これらは、コントリビューション・リージョンでコントリビュータが使用できるコンテンツ作成オプションおよび切替えオプションを指定し、これらのリージョンに関連付けられているコンテンツ・ファイルに対するデフォルトのメタデータも設定します。
- **要素定義**: 要素タイプに対する編集エクスペリエンスを定義するファイル。特に、要素の編集の際、コントリビュータに可能なことを指定します。
- **変換定義**: Web サイト上にあるネイティブ・ドキュメントの変換ルールを指定するファイル。
- **その他**: Flash アニメーション、ビデオ・ファイル、オーディオ・ファイルなど、Web サイト上で使用できるその他のファイル。

これらのファイル・タイプの詳細は、『Site Studio デザイナ・ガイド』を参照してください。

5.1.4 Exclude From Lists

Exclude From Lists メタデータ（実際の名前は xDontShowInListsforWebsites）は Web サイトのリストです。これは、コントリビュータがユーザー・インタフェースを介して、コントリビュータ・データファイルまたはネイティブ・ドキュメントを Web サイト上の動的リストに表示しないことを指定したリストです。

コントリビュータがファイルを動的リストから除外すると、その Web サイトの ID がこの値に追加されます。後からコントリビュータが Web サイトの動的リストにそのコンテンツを再び含めると、Web サイト ID がこのメタデータ・フィールドから削除されて、コンテンツは再び動的リストの対象になります。

注意： 特定のデータファイルまたはネイティブ・ドキュメントについて Web サイトの値がこのメタデータ・フィールドに含まれる場合、そのコンテンツはサイトのどのリストにも表示されません。ただし、サイトの検索結果には表示されます。

5.1.5 Region Definition

Region Definition メタデータ・フィールド（実際の名前は xRegionDefinition）は、コントリビュータ・データファイルが関連付けられているリージョン定義を指定します。データファイルは、1つのリージョン定義にのみ関連付けられますが、リージョン定義は多くのデータファイルに関連付けられる場合があります。

リージョン定義は Web サイト上で使用されるコンテンツのタイプを定義します。これらはコンテンツ・クラスと考えることができます。これらは基本的に、特定のサイト・コンテンツ・タイプの再使用可能な情報の様々なチャンクを定義する個々の要素のグループです。たとえば、要素タイトル、サブタイトル、テキスト導入部、テキスト本体およびイメージから構成される、「Press-Release」というリージョン定義（コンテンツ・クラス）があるとします。コントリビュータ・データファイルはリージョン定義と関連付けられ、リージョン定義内のそれぞれの要素のデータが格納されます。（コントリビュータが処理できるデータは、要素定義により制御されます。）

リージョン定義では、構成部分（要素）におけるサイト・コンテンツ・タイプの定義に加え、関連付けられたコントリビューション・リージョンに対してコントリビュータが使用できるコンテンツ作成および切替えオプションも指定します。たとえば、コントリビュータでリージョンのコンテンツを切替えられるようにコントリビューション・リージョンが設定されている場合、サーバー上の（ネイティブ・ドキュメントまたは新しいコントリビュータ・データファイルではなく）既存のコントリビュータ・データファイルのみを使用できます。（プレースホルダ定義によって、コントリビュータが実際にコントリビューション・リージョンのコンテンツを切り替えられるかどうかは制御されることに注意してください。）最後に、リージョン定義では、コンテンツをコンテンツ・サーバーにチェックインする際の、コントリビューション・リージョン内のコンテンツに対するデフォルト・メタデータも設定します。

リージョン定義の詳細は、『Site Studio デザイナ・ガイド』を参照してください。

5.2 コントリビュータのデフォルト・ショートカット・キーの変更

Web サイト上でコントリビューション・モードに切り替えるデフォルトのショートカット・キーは、**[Ctrl]+[Shift]+[F5]** ですが、これを変更できます。このためには、**Site Studio** がインストールされているコンテンツ・サーバーの **custom** ディレクトリへのアクセス権が必要です。この値を変更した場合はサイトのデザイナーとコントリビュータに通知してください。

デフォルトのショートカット・キーを変更するには、次のようにします。

1. 次のディレクトリを参照して移動します (**[CS-Dir]** はコンテンツ・サーバーのインストール場所)。

```
[CS-Dir]¥custom¥SiteStudio¥publish¥resources¥wcm¥sitestudio¥
```

2. **wcm.toggle.js** をテキスト・エディタで開きます。
3. 機能 **OnKeyDown** を検索します。
4. **WCM.CONTRIBUTOR.Toggle** をコールするために別のショートカット・キーを使用するように、この機能の実装を変更します。

この機能は仮想キー・コードを使用して、ユーザーが入力したキーの組合せを判別します。デフォルト値は、**[Ctrl]+[Shift]+[F5]** です。**[F5]** キーは仮想キー・コードの **116** (16 進数の **0x74**) です。他の一般的なファンクション・キーのコードは、**F1** から **F12** がそれぞれ **112 (0x70)** から **123 (0x7B)** になります。

5. **wcm.toggle.js** を保存して閉じます。

注意： 次に **Site Studio** をアップグレードするとき、またはパッチをインストールするときに、場合によっては、ショートカット・キーの設定を維持するためにこの手順を再び実行する必要があります。

注意： 仮想キー・コードがオペレーティング・システム間で異なるため、コントリビュータにより様々なオペレーティング・システムが使用される可能性がある場合、キー操作を判別するために使用されるキー・コードには特別な考慮事項が必要となります。

5.3 消費サーバーのアクセス禁止

コントリビュータは、ショートカット・キーを使用してコントリビューション・モードに切り替え、投稿アイコンをクリックしてコントリビュータ・アプリケーションを起動すると、Web サイトのコンテンツにアクセスできます。

Web サイトの構築に使用されるサーバーではそのようなアクセスが必要ですが、消費サーバー (実際の Web サイトの実行に使用されるサーバー) では望ましくありません。コントリビュータが消費サーバーにアクセスできないようにするには、次のサーバー構成変数を作成します (**[CS-Dir]/config/config.cfg** 内)。

```
DisableSiteStudioContribution=true
```

この変数が存在しない場合、または **false** に設定された場合は、コントリビュータのアクセスが許可されます。

コンテンツ・サーバーを再起動してください。

5.4 デフォルトのコントリビュータ・エディタの変更

コントリビュータ・アプリケーションで使用するデフォルトのエディタは、FCKeditor ですが、これは Ephox に変更できます。どちらのエディタも、Site Studio コントリビューション編集環境に最適化されています。

Ephox をコントリビューション・エディタとして使用する場合、次のサーバー構成変数を含めます ([CS-Dir]/config/config.cfg 内)。

```
SSDefaultEditor=ephox
```

デフォルトのエディタを変更して FCKeditor に戻す場合、この変数を削除するか、次のように変更します。

```
SSDefaultEditor=fck
```

コンテンツ・サーバーを再起動してください。

5.5 カスタム要素の更新

10gR3 (10.1.3.3.3) より前のリリースの Site Studio を使用して作成したカスタム要素フォームは、Site Studio 10gR4 と互換性がありません。手動でアップグレードし、再度オーサリングする必要があります。下位互換性を保持しない主な理由は、Site Studio が以前に Internet Explorer 独自仕様である「window.external」機能に依存していたためです (ActiveX コントロールがコントリビュータ・アプリケーションで使用されていたため)。この機能は、Site Studio 10gR3 (10.1.3.3.3) 以降で使用されている、ブラウザに依存しない JavaScript ベースのコントリビュータ・アプリケーションにより、Site Studio から削除されました。詳細は、『Site Studio テクニカル・リファレンス・ガイド』を参照してください。

5.6 認証検証アプレットの使用

Site Studio を設定して、Ephox をコントリビュータ・エディタとして使用する場合、コントリビュータ・アプリケーションは、1つ以上の署名済プラグインがパッケージされた署名済 Java アプレットを使用します。指定された任意のシステムで初めてこれらのアプレットがロードされると、ユーザーはセキュリティ証明書の承認を求められます。Java Virtual Machine (JVM) で複数の署名済アプレットを同時にロードしようとするとう問題が発生し、ブラウザがハングする場合があります。クライアント・コンピュータでこの問題が発生した場合、2つの解決策があります。1つは、IT 部門がセキュリティ証明書をクライアント・コンピュータにプッシュすることです。もう1つの方法は、手動で証明書を同時に承認することです。Site Studio には、コンテンツ・サーバー上に「Site Studio Certificate Validation」ページがあり、ユーザーが証明書を承認できます。このページは、ユーザー・プロファイル・ページ (「My Profile」の下) からアクセスできます。

Site Studio コントリビュータ用のカスタム・プラグインを作成できることから、このページは、カスタムの署名済プラグインと同じ方法で証明書を承認できるように拡張できます。このコンテキストでは、次のサーバー構成変数が使用されます ([CS-Dir]/config/config.cfg 内)。

- [SSEExtraCertificateClasses](#)
- [SSEExtraCertificateLabels](#)
- [SSEExtraCertificateJars](#)
- [SSHttLayerManager](#)

SSEExtraCertificateClasses

このエントリを使用すると、証明書検証アプレットによってロードされるクラス・リストに、顧客固有のエントリが追加されます。値は、証明書検証プロセス中にロードするクラスのスペース区切りリストです。次に例を示します。

```
SSEExtraCertificateClasses=com.xalco.XalcoEphoxPlugin com.zeng.TextGenerator
```

注意：

- リストの各クラスには、SSEExtraCertificateLabels エントリを使用して、対応するラベルを設定する必要があります。
- これは、SSEExtraCertificateLabels および SSEExtraCertificateJars エントリとともに使用する必要があります。

SSEExtraCertificateLabels

このエントリを使用すると、証明書検証アプレットによってチェックされた証明書リストに、顧客固有のラベルが追加されます。値は、証明書検証プロセス中に表示する証明書の説明のカレット区切りリストです。次に例を示します。

```
SSEExtraCertificateLabels=Xalco Certificate^Ravenna Certificate
```

注意：

- リストの各ラベルには、SSEExtraCertificateClasses エントリを使用して、対応するクラスを設定する必要があります。
- これは、SSEExtraCertificateClasses および SSEExtraCertificateJars エントリとともに使用する必要があります。

SSEExtraCertificateJars

このエントリを使用すると、証明書検証アプレットで使用されるクラスパスに、顧客固有のエントリが追加されます。これにより、SSEExtraCertificateClasses エントリにリストされるクラスを JVM で検索できます。値は、証明書検証プロセス中に表示する証明書の説明のカンマ区切りリストです。次に例を示します。

```
SSEExtraCertificateJars=<$HttpWebRoot$>resources/xalco/XalcoEphoxPlugin.jar,  
<$HttpWebRoot$>groups/public/documents/adacct/HelloWorldPlugin.jar
```

注意：

- エントリに埋め込まれた `Idoc` スクリプト・タグは評価されます。
- これは、SSEExtraCertificateClasses および SSEExtraCertificateLabels エントリとともに使用する必要があります。

SSHttLayerManager

このエントリにより、Ephox エディタ内の Sun またはデフォルトの HttpLayer マネージャを使用できます。SSL 環境で実行している場合は、Sun レイヤーに変更した方がよい結果が得られる可能性があります。設定できる値は次のとおりです。

- SSHttLayerManager=default: デフォルトの、内部 Ephox HttpLayer マネージャを使用します。
- SSHttLayerManager=sun: Sun HttpLayer マネージャを使用します。

これは、Ephox の `setHttpLayerManager` 構成エントリに対応しています。詳細は、http://www.ephox.com/developers/editliveforjava/v50/html/prop_httpmanagerlayer.html を参照してください。

5.7 シングル・サインオン (SSO) 環境の構成

Site Studio 10gR4 は、フォームベース認証およびシングル・サインオン (SSO) 環境で使用できます。次の HTML コメントを、ユーザーに資格証明の入力を求めるログイン・ページに追加する必要があります。

```
<!--IdcClientLoginForm=1-->
```

このトークンは、スペースまたは大文字小文字を変更せず、そのまま使用する必要があります。ログイン・フォームにこの HTML コメントが含まれていない場合、Site Studio デザイナでフォームベース・ログインで保護されている Web サイトに接続を試みても、正常に接続できません。Site Studio デザイナで「200 OK」メッセージが表示されますが、接続は失敗します。

また、フォームベース・ログインのソリューションで、ログイン・フォームがリダイレクトを使用せずにクライアントに配布される場合、コンテンツ・サーバーの ExtranetLook コンポーネントと同様、次のサーバー構成変数を [CS-Dir]/config/config.cfg に追加する必要があります。

```
SSEnableExtranetLookCompatibility=1
```

config.cfg ファイルの変更後、コンテンツ・サーバーを再起動する必要があります。この構成変数を追加しないと、Web サイトをコントリビューション・モードに切り替えた後に、ブラウザにパスベースの URL ではなく CGI ベースの URL が表示されます。

5.8 コントリビュータのデバッグの有効化

Site Studio コントリビュータでは、アプリケーションの x-browser/ プラットフォームのロギング・メカニズムとしてコンソール・ウィンドウを使用できます。このコンソール・ウィンドウは、単一のブラウザ・ウィンドウから複数のコンテキスト (HTML ウィンドウ・オブジェクト) にわたってロギングおよび JavaScript のコード実行を行う場合に、特に適しています。コンソール・ウィンドウのロギング・ウィンドウにロギングされたすべての手順には、手順が実行された実行時間およびコンテキストが表示されます。

コンソール・ウィンドウの使用はオプションで、デフォルトのコンテンツ・サーバー (weblayout) の Web アクセス可能なディレクトリにデプロイされません。wcm.console.htm ファイルは、[CS-Dir]¥custom¥SiteStudio¥support ディレクトリ内にあります。コンソール・ウィンドウを使用するには、このファイルをコンテンツ・サーバーの Web アクセス可能なディレクトリ内のベース・ディレクトリ [CS-Dir]¥weblayout¥resources¥wcm¥base にコピーする必要があります。

正しく配置された wcm.console.htm ファイルを使用してコンソール・ウィンドウを起動するには、2つの方法があります。

- **コンソール・ウィンドウの URL の使用:** URL が明らかな場合、コンソール・ウィンドウに直接ナビゲートできます。通常、コンソール・ウィンドウは Site Studio インストールの次の場所にあります。

```
http://[server]/[instance]/resources/wcm/base/wcm.console.htm
```

- **キー・コマンドの使用:** コントリビュータ・アプリケーションから、キー・コマンド [Ctrl]+[Alt]+[Shift]+[C] または [Ctrl]+[Alt]+[Shift]+[E] を使用すると、すでに開いていない場合にはコンソール・ウィンドウが起動します。後者のキー・コマンドでは、コンソール・ウィンドウが開くと、すべてのランタイム・エラーも表示されます。コンソール・ウィンドウがコンテンツ・サーバーの Web アクセス可能なディレクトリ (weblayout) にインストールされていない場合、[Ctrl]+[Alt]+[Shift]+[E] を押すことにより、ランタイム・エラーが存在する場合には汎用エラー・ダイアログが表示されます。エラー・ダイアログにはランタイム・エラーのみが表示され、ランタイム・ロギングは表示されません。

デバッグのロギング・レベル (Ephox)

Site Studio が、Ephox をコントリビューション・エディタとして使用するよう設定されている場合、SSEditorDebugLevel サーバー構成変数 ([CS-Dir]/config/config.cfg 内) を使用して、エディタが Java コンソールに発行するロギングの量を制御できます。このエントリは、次の値のいずれかに設定できます。

- fatal
- error
- warn
- info
- debug
- http

この設定のデフォルト値は info です。config.cfg ファイルの変更後、コンテンツ・サーバーを再起動する必要があります。

5.9 10gR4 より前の Site Studio プロジェクトの使用

Site Studio 10gR4 は、以前のリリースと下位互換性があります。これにより、Site Studio Designer 10gR4 を、Site Studio の以前のリリースで作成したプロジェクトで使用できます。それら自体をアップグレードする必要はありません。ただし、これらのプロジェクトは引き続きレガシー・モードで動作することに注意する必要があります。つまり、プロジェクトでは 10gR4 より前のアーキテクチャが使用されるため、Site Studio 10gR4 で導入された新しいアーキテクチャおよび機能は利用できません。

7.5 より前のデザイナーで作成された Site Studio プロジェクトを使用する場合、これらを最初にアップグレードする必要があります。詳細は、[付録 B 「7.5 より前の Web サイトのアップグレード」](#)を参照してください。アップグレード後、これらのプロジェクトは、レガシー・プロジェクトとして動作することに注意してください。

Site Studio ソフトウェアのアンインストール

この項の内容は次のとおりです。

- A-2 ページの「[デザイナーのアンインストール](#)」
- A-2 ページの「[Site Studio コンポーネントのアンインストール](#)」

A.1 デザイナのアンインストール

Site Studio デザイナをクライアント・コンピュータからアンインストールするには、次のようにします。

1. Windows の「コントロールパネル」を開きます。
2. 「アプリケーションの追加と削除」(Windows 2000)、「プログラムの追加と削除」(Windows XP) または 「プログラムのアンインストール」(Windows Vista) をクリックします。
3. 「Oracle Site Studio Designer 10gR4」を選択します。
4. 「削除」をクリックし、Site Studio Designer アンインストール・ウィザードを開始します。
5. コンピュータから Site Studio デザイナ・ソフトウェアを削除するかどうかの確認を求められたら、「Yes」をクリックします。

ソフトウェアがクライアント・コンピュータから削除されます。

A.2 Site Studio コンポーネントのアンインストール

Site Studio コンポーネントを無効化 (またはアンインストール) することもできます。コンポーネントをアンインストールせずに無効にしておくと、後でまた有効化することができ、再インストールの必要がありません。

Site Studio コンポーネントを無効化またはアンインストールするには、次のようにします。

1. 新しいブラウザ・ウィンドウを開き、システム管理者 (sysmanager ロール) として Content Server にログインします。
2. 「Administration Applets」ページに移動して、「Admin Server」リンクをクリックします。
3. 「Content Admin Server」ページで、Site Studio コンポーネントをアンインストールするコンテンツ・サーバー・インスタンスのボタンをクリックします。
コンテンツ・サーバー・インスタンスのステータス・ページが表示されます。
4. サーバー・インスタンスのオプション・リストで、「Component Manager」リンクをクリックします。
「Component Manager」ページが表示されます。
5. 「Enabled Components」の下で「SiteStudio」を選択します。
6. 「Disable」をクリックします。
7. コンテンツ・サーバーを再起動します。
8. コンポーネントを無効化するのではなく、完全にアンインストールする場合は、「Component Manager」ページに戻り、「Uninstall Component」リストで「SiteStudio」を選択して、「Uninstall」をクリックします。その後、コンテンツ・サーバーを再起動します。

7.5 より前の Web サイトのアップグレード

この項の内容は次のとおりです。

- B-2 ページの「はじめに」
- B-2 ページの「自動アップグレードの処理内容」
- B-3 ページの「コンテンツ・サーバーのアップグレード」
- B-7 ページの「その他の手順の手動実行」

B.1 はじめに

Site Studio を 7.5 より前のリリースからアップグレードしている場合は、Web サイトをアップグレードしてから、Site Studio 10gR4 で使用する必要があります。これは、Site Studio リリース 7.5 および 10gR3 では、次のような重要なアーキテクチャの変更があるためです。

- サイト階層がプロジェクト・ファイルに格納され、フォルダを利用しないようになりました。結果として、Content Server の Folders 機能は必要なくなりました。
- Web サイトの URL が、SS_GET_PAGE サービスを表示する CGI ベース・アドレスではなく、論理パスと接尾辞として表示されます。結果として、わかりやすいパスベース URL が表示されます。
- レイアウト・ページで <base> タグが使用されなくなりました。このため、base タグを利用するハイパーリンクと参照を変更する必要があります。
- siteId とルート・ノード ID は同じ意味ではなくなりました。

アップグレード後には、アップグレードされたプロジェクトは Site Studio 10gR4 でレガシー・プロジェクトとして動作することに注意する必要があります。つまり、これらのプロジェクトでは 10gR4 より前のアーキテクチャが使用されるため、Site Studio 10gR4 で導入された新しいアーキテクチャおよび機能を利用できません。Site Studio 7.5 または 10gR3 を使用して作成されたプロジェクトの場合も同様です。これら自体をアップグレードする必要はなく、Site Studio 10gR4 で使用できますが、これらは引き続きレガシー（たとえば、10gR4 より前）・モードで機能します。

B.2 自動アップグレードの処理内容

7.5 より前のリリースの Site Studio と Web サイトをアップグレードすると、次の処理が自動的に実行されます。

処理	説明
フォルダベース・サイトからプロジェクトベース・サイトへのアップグレード	フォルダ構造の既存の階層が、プロジェクト・ファイル内に複製されます。ルートの dCollectionName は siteLabel、ルートの dCollectionID は siteId として使用され、originalCollectionID プロジェクト属性が設定され、サイト・タイプがルート・セクションからプロジェクトに移されます。
新しいサイトのカスタム・セクション・プロパティの更新	タイプが siteid と url であるカスタム・セクション・プロパティが更新されます（必要な場合は、わかりやすい URL が追加されます）。
レイアウト・ページのフラグメント・インスタンス・パラメータの更新	タイプが managedurl と url であるパラメータが更新されます。
メタデータの移入	「Create Project Files」オプションが有効になっている場合は、xWebsiteSection 値が移入されます（xCollectionID から導出）。
レイアウト・ページとデータファイルのリンクの更新	「Upgrade Layouts」オプションと「Upgrade Data Files」オプションが有効になっている場合、レイアウト・ページとコントリビュータ・データファイルの weblayout リンクが、HttpRelativeWebRoot トークンを含むように更新されます。オプションとして、javascript リンクも更新されます。
ナビゲーションの更新	Web サイトのナビゲーション・ファイルが再生成されます。

注意： カスタム要素は自動的にアップグレードできません。詳細は、B-11 ページの「[カスタム要素の更新](#)」を参照してください。

B.3 コンテンツ・サーバーのアップグレード

サイトのアップグレードでは、使用している各コンテンツ・サーバーの Site Studio コンポーネントをまずアップグレードし、次にコンテンツ・サーバーに格納されている Web サイトをアップグレードします。

- B-3 ページの「[1つのコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード](#)」
- B-3 ページの「[複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード](#)」
- B-5 ページの「[完全アップグレードの実行](#)」
- B-6 ページの「[最小アップグレードの実行](#)」

Folders コンポーネントは Site Studio リリース 7.5 以上では使用されませんが、Web サイトのアップグレード時にはフォルダを維持する必要があります。これは、各サイトをフォルダベースの階層からプロジェクトベースの階層に移行できるようにするためです。

その後、Folders コンポーネントを無効にすることができます（フォルダを利用する Check Out and Open コンポーネントを使用しない場合）。フォルダの使用を継続する場合は、適切なメタデータを使用してフォルダを構成する必要があります（B-11 ページの「[フォルダへの Web Site Section の割当て](#)」を参照）。

注意： アップグレードの手順を実行すると、サーバーのすべての Web サイトがアップグレードされます。選択したサイトのみをアップグレードする場合は、その他のサイトのコピーを別のサーバーに作成する必要があります。

B.3.1 1つのコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード

Web サイトが1つのコンテンツ・サーバーに格納されている場合は、次のようにアップグレードを行います。

1. 新しい Site Studio コンポーネントをインストールします（事前に古いコンポーネントをアンインストールします）。詳細は、[第2章「Site Studio コンポーネントのインストール」](#)を参照してください。
2. コンテンツ・サーバーで完全アップグレードを実行します。詳細は、B-5 ページの「[完全アップグレードの実行](#)」を参照してください。
3. 自動アップグレードで処理されないその他の手順を手動で実行します。詳細は、B-7 ページの「[その他の手順の手動実行](#)」を参照してください。

B.3.2 複数のコンテンツ・サーバー・インスタンスでのサイトのアップグレード

複数のコンテンツ・サーバーにサイトがある場合があります。それぞれ、開発サーバー、投稿サーバー、本番サーバーなど様々な目的に利用されます。

図 B-1 複数のコンテンツ・サーバー・インスタンス



各サーバー（ソース・サーバー）のコンテンツは、アーカイバおよびレプリケータ・ユーティリティを使用して次のサーバー（ターゲット・サーバー）にコピーされます。このため、レプリケーションの問題が発生しないように、各サーバーのサイトを注意深く計画してアップグレードすることが重要です。

コンテンツ・サーバーの最初の2つのインスタンス

- コンテンツ・サーバー間のレプリケーションを停止します。
- 新しいSite Studio コンポーネントをインストールします。詳細は、第2章「Site Studio コンポーネントのインストール」を参照してください。

コンテンツ・サーバーのソース・インスタンス

- サイトの完全アップグレードを実行します。詳細は、B-5 ページの「完全アップグレードの実行」を参照してください。
- 自動アップグレードで処理されないその他の手順を手動で実行します。詳細は、B-7 ページの「その他の手順の手動実行」を参照してください。

コンテンツ・サーバーのターゲット・インスタンス

- サイトの最小アップグレードを実行します。詳細は、B-6 ページの「最小アップグレードの実行」を参照してください。

コンテンツ・サーバーの両方のインスタンス

- コンテンツ・サーバー間のレプリケーションを再開します。

前述したように、コンテンツ・サーバーのすべてのインスタンスに新しいコンポーネントをインストールして、Web サイトをアップグレードすると、サイトのレプリケーションを再開できます。

Site Studio のレプリケーション機能を使用できます（『Site Studio 管理者およびマネージャ・ガイド』を参照）。あるいは、アーカイバおよびレプリケータを使用しており、継続して使用する予定がある場合は、アーカイブ問合せを変更して Site Studio プロジェクト・ファイルを組み込むことで可能になります。

次のターゲット・コンテンツ・サーバー（レプリケーションの下流）

- ソース・コンテンツ・サーバーとターゲット・コンテンツ・サーバー間のレプリケーションを停止します。

注意：この場合、ソース・サーバー（ボックス 2）は前の手順のターゲット・サーバーであり、ターゲット・サーバー（ボックス 3）はレプリケーション・プロセスの下流にある次のサーバーです。

- 新しいSite Studio コンポーネントをインストールします。詳細は、第2章「Site Studio コンポーネントのインストール」を参照してください。
- サイトの最小アップグレードを実行します。詳細は、B-6 ページの「最小アップグレードの実行」を参照してください。
- ソース・コンテンツ・サーバーとターゲット・コンテンツ・サーバー間のレプリケーションを再開します。

レプリケーション・プロセスの下流にあるコンテンツ・サーバーの各ターゲット・インスタンスでこの最後の手順を繰り返します。

B.3.3 完全アップグレードの実行

コンテンツ・サーバーの完全アップグレードは、シングルサーバー設定で必要です。複数サーバー設定のソース・サーバーでも必要です。(複数サーバー設定のその他すべてのサーバーでは最小アップグレードが必要です。)

サイトをアップグレードすると、Site Studio によって既存のフォルダベース・サイトがプロジェクトベース・サイトに変更されます。このとき、管理されるアイテムとしてプロジェクト・ファイルがコンテンツ・サーバーに作成されます。このため、各 Web サイトを表すプロジェクト・ファイルに割り当てるメタデータを指定する必要があります。

アップグレード・プロセスにおいて、変更されたコンテンツの索引付けをコンテンツ・サーバーが実行しようとするますが、この処理は多くのリソースを消費し、時間が長くかかることがあります。アップグレード・プロセスを開始する前に、一時的に自動索引付けを無効にすることをお勧めします。終了したら再び有効にしてください。(詳細は、Content Server 管理のドキュメントを参照してください。)

完全アップグレードを開始する前に、新しい Site Studio コンポーネントをサーバーにインストールして有効にしておく必要があります。詳細は、第 2 章「Site Studio コンポーネントのインストール」を参照してください。

完全アップグレードを実行するには、次のようにします。

1. 管理者としてコンテンツ・サーバーにログオンして、「Administration」ページを開き、「Site Studio Administration」ページを開きます。
2. 「Set Default Project Document Information」をクリックします。
「Set Default Project Document Information」ページが表示されます。ここで、Site Studio で作成する新しいプロジェクトにデフォルトのメタデータを割り当てます。
3. メタデータの値を指定したら、「Update」をクリックします。
これで「Site Studio Administration」ページが再び表示されます。ここでアップグレード・プロセスを開始できます。
4. 「Manage Web Sites」をクリックします。
5. 「Go to Web Sites Update Page」をクリックします。(このオプションが表示されるのは、古い Web サイトが検出された場合のみです。)
6. 「Advanced Options」をクリックして、サイトのアップグレード・オプションを指定します。

図 B-2 拡張アップグレード・オプション画面



7. 完全アップグレードの場合は次のように選択します。
 - 「Create Project files」を選択します。
 - 「Upgrade Layouts」を選択します。
 - 「Upgrade Data Files」を選択します。

- 「Convert Hyperlinks」を選択して、次のいずれかのリンク形式を選択します。
 - **To Server-Side Links:** サーバー側スクリプトを使用するターゲットの場所のコード化された ID が含まれるリンク
 - **To Path-Based URLs:** ターゲットの場所へのフルパスが含まれるリンク
- 8. 「Set Options」をクリックして「Upgrade Legacy Web Sites」ページに戻ります。
- 9. 「Start Upgrade」をクリックします。

このページには、アップグレードする必要がある個々のファイルが表示されます。アップグレード・プロセスの完了を知らせるメッセージが表示されるまで待機してください。

注意： サイトのアップグレードでは、サイト階層と多くのリンクが自動的に更新されます。また、コンテンツ・サーバーの「Web Sites」メニューにサイトが表示されるようになります。

B.3.4 最小アップグレードの実行

最小アップグレードは複数サーバー設定で必要です。すべてのターゲット・サーバー（Web サイトのレプリケート先のサーバー）に適用されます。

最小アップグレードを開始する前に、新しい Site Studio コンポーネントをサーバーにインストールして有効にしておく必要があります。詳細は、第 2 章「Site Studio コンポーネントのインストール」を参照してください。

最小アップグレードを実行するには、次のようにします。

1. 管理者としてコンテンツ・サーバーにログオンして、「Administration」ページを開き、「Site Studio Administration」ページを開きます。
2. 「Set Default Project Document Information」をクリックします。
「Set Default Project Document Information」ページが表示されます。ここで、Site Studio で作成する新しいプロジェクトにデフォルトのメタデータを割り当てます。
3. メタデータの値を指定したら、「Update」をクリックします。
これで「Site Studio Administration」ページが再び表示されます。ここでアップグレード・プロセスを開始できます。
4. 「Manage Web Sites」をクリックします。
5. 「Go to Web Sites Update Page」をクリックします。（このオプションが表示されるのは、古い Web サイトが検出された場合のみです。）
6. 「Advanced Options」をクリックして、サイトのアップグレード・オプションを指定します (図 B-2)。
7. 「Create Project files」を選択します。

注意： これでプロジェクト・ファイルがアップグレードされ、Web Site Section メタデータに値が移入されます。

8. 「Set Options」をクリックして「Upgrade Legacy Web Sites」ページに戻ります。
9. 「Start Upgrade」をクリックします。
アップグレード・プロセスの完了を知らせるメッセージが表示されるまで待機してください。

これで、コンテンツ・サーバーの「Web Sites」メニューにサイトが表示されるようになります。

B.4 その他の手順の手動実行

Web サイトのアップグレードが終了したら、次の手順を手動で実行する必要があります。

- B-7 ページの「[サイト・ナビゲーションの更新](#)」
- B-7 ページの「[コンテンツ・サーバー索引の再作成](#)」
- B-7 ページの「[カスタム・フラグメントの更新](#)」
- B-11 ページの「[カスタム要素の更新](#)」
- B-11 ページの「[フォルダへの Web Site Section の割当て](#)」
- B-12 ページの「[JSP コードの更新](#)」

B.4.1 サイト・ナビゲーションの更新

7.5 より前の Web サイトをアップグレードした後は、そのナビゲーション・ファイルを更新する必要があります。これは、デザイナー（「[Update Navigation](#)」ボタンを使用する）または「[Site Studio Administration](#)」ページ（特に「[Manage Web Sites](#)」ページ）で行うことができます。この手順は、コントリビュータがサイトで正常に機能するために必要です。

B.4.2 コンテンツ・サーバー索引の再作成

7.5 より前の Web サイトをアップグレードした後は、コンテンツ・サーバーの索引を再作成する必要があります。コンテンツ・サーバーが、データベース検索および索引付け（全文またはメタデータのみ）を使用するように設定されている場合は、検索索引を再作成する必要はありません。別の検索エンジン（通常は Verity）を使用している場合は、検索索引を再作成する必要があります。サイトのフォルダに存在するすべてのコンテンツ・アイテムに対する xWebsiteSection メタデータ・フィールドが Site Studio によって更新されるため、この手順が必要になります。

警告： 検索索引の再作成は、Content Server インスタンスで管理するコンテンツ・アイテムの数によっては、非常に時間のかかるプロセスになる場合があります。そのため、再作成は Content Server の使用がオフピークである時間（通常は夜間または週末）に実行することをお勧めします。

索引の再作成の詳細は、Content Server 管理のドキュメントを参照してください。

B.4.3 カスタム・フラグメントの更新

7.5 より前の Web サイトをアップグレードした後で実行する必要がある手動更新のほとんどに、カスタム・フラグメントの変更が伴います。Site Studio に含まれていた事前定義済みのフラグメントを現在使用している場合は、この作業は必要ありません。各 Site Studio リリースに含まれる各フラグメントは更新されているためです。

多くの場合、組織固有の目的を満たすために、フラグメントをカスタマイズしているか、新しいフラグメントを導入しています。最新バージョンで機能するようにフラグメントを処理するために、次の 3 つの手順を実行する必要があります。

- [<base> タグに依存するリンクの変更](#)
- [SS_GET_PAGE の JavaScript による廃止されたリンクの変更](#)
- [GET_SEARCH_RESULTS の更新](#)

B.4.3.1 <base> タグに依存するリンクの変更

コンテンツ・サーバーの Web アクセス可能なディレクトリ (weblayout) を指す <base> タグは使用されなくなりました。サイトのアップグレードの際に、レイアウト・ページとコントリビュータ・データファイルの必要なコードは Site Studio によって更新されますが、カスタム・フラグメントとスクリプトではこの手順を手動で実行する必要があります。

これには、<base> タグの URL と相対的なリンクを手動でコーディングしなおします。また、かわりにサーバー側変数 `HttpRelativeWebRoot` を使用します。

例

たとえば、次のような画像へのリンクがある場合、

```

```

次のように置き換える必要があります。

```

```

B.4.3.2 SS_GET_PAGE の JavaScript による廃止されたリンクの変更

既存のフラグメントで `SS_GET_PAGE` の `javascript:link` または `javascript:nodelink` 形式のハイパーリンクが使用されている場合は、パスベースの URL に変更してその利点を活用できます。(詳細は、『Site Studio デザイナ・ガイド』を参照してください。)

例

たとえば、次のようなリンクがある場合、

```
<a href="javascript:nodelink(42);">link</a>
```

次のように置き換える必要があります。

```
<a href="<!--ssServerRelativeSiteRoot-->products/servers/index.htm">link</a>
```

B.4.3.3 GET_SEARCH_RESULTS の更新

`GET_SEARCH_RESULTS` サービスを使用していたフラグメントは引き続き機能しますが、`SS_GET_SEARCH_RESULTS` サービスを使用するようにアップグレードしないかぎり、Site Studio 7.5 および 10gR3 で提供される機能を利用できません。

`SS_GET_SEARCH_RESULTS` サービスを使用すると、次の利点があります。

- **limitscope ロジック** (現在はサービスによって提供され、フラグメントでは必要ない) : 現行 Web サイト内の項目のみに検索結果を限定します。
- **dontshowinlists ロジック** (現在はサービスによって提供され、フラグメントでは必要ない) : コントリビュータがリストから除外していない項目のみに検索結果を限定します。
- **ssUrl**: この列によって、検索結果の各行にわかりやすい URL が提供されます。

通常、`GET_SEARCH_RESULTS` サービスを使用するフラグメントは、動的リスト・フラグメントと検索結果ナビゲーション・フラグメントです。必要な更新は、アップグレード元の Site Studio リリースによって異なります。

- Site Studio リリース 6.5 を使用しており、そのリリースを使用して動的リスト・フラグメントまたは検索結果フラグメントをカスタマイズしていた場合 (たとえば、Site Studio フラグメントをコピーして、カスタム・コードを追加するなど)、古い `xWebsiteID` メタデータ・フィールドを使用して `limitscope` ロジックを実行するコードが使用されることになります。

- Site Studio リリース 7.2 を使用しており、そのリリースを使用して動的リスト・フラグメントまたは検索結果フラグメントをカスタマイズしていた場合（たとえば、Site Studio フラグメントをコピーして、カスタム・コードを追加するなど）、新しい `xWebsites` メタデータ・フィールドを使用して `limitscope` ロジックを実行するコードが使用されることとなります。さらに、新しい `xDontShowInListsForWebsites` メタデータ・フィールドを使用して `dontshowinlists` ロジックを実行するコードも使用されます。

このいずれの場合も、古い `limitscope` ロジックと `dontshowinlists` ロジックを削除して、新しい `SS_GET_SEARCH_RESULTS` サービス（同じ機能を内部的に提供する）を使用するために、フラグメントを更新する必要があります。

例

Site Studio 6.5 では、Standard Dynamic List フラグメントに、`ssLimitScope` パラメータに関する次のコードが含まれます。これを削除する必要があります。

```
<!--$QueryText=eval(ssQueryText)-->
<!--$if ssLimitScope like "true"-->
  <!--$if strEquals(QueryText, '')-->
    <!--$QueryText='xWebSiteID=' & siteId-->
  <!--$else-->
    <!--$QueryText=(' & QueryText & ') and (xWebSiteID=' & siteId & ')-->
  <!--$endif-->
<!--$endif-->
```

Site Studio 7.2 では、Standard Dynamic List フラグメントに、`ssLimitScope` パラメータに関する次のコードが含まれます。これを削除する必要があります。

```
<!--$QueryText=eval(ssQueryText)-->
<!--$if ssLimitScope like "true"-->
  <!--$if strEquals(QueryText, '')-->
    <!--$QueryText='xWebsites &lt;contains&gt; ' & siteId-->
  <!--$else-->
    <!--$QueryText=(' & QueryText & ') and (xWebsites &lt;contains&gt;' &
siteId & ')-->
  <!--$endif-->
<!--$endif-->

<!--$if strEquals(QueryText, '')-->
  <!--$QueryText= 'not (xDontShowInListsForWebsites &lt;contains&gt; ' & siteId &
')-->
<!--$else-->
  <!--$QueryText=(' & QueryText & ') and not (xDontShowInListsForWebsites
&lt;contains&gt; ' & siteId & ')-->
<!--$endif-->
```

フラグメントから古い `limitscope` ロジックを削除したら、`SS_GET_SEARCH_RESULTS` を使用するように `GET_SEARCH_RESULTS` サービス・コールを変更します。ただし、`SS_GET_SEARCH_RESULTS` サービスを起動する前に、次のパラメータの値を設定する必要があります。

パラメータ	説明
<code>ssLimitScope</code>	<code>SS_GET_SEARCH_RESULTS</code> サービスによって <code>limitscope</code> ロジックを適用する必要があることを指定します。通常、この <code>true</code> または <code>false</code> の値はフラグメントのパラメータ値によって指定されます。
<code>ssDontShowInLists</code>	<code>SS_GET_SEARCH_RESULTS</code> サービスによって <code>dontshowinlists</code> ロジックを適用する必要があることを指定します。通常、この <code>true</code> または <code>false</code> の値はすべてのフラグメントで <code>true</code> に設定されます。
<code>ssTargetNodeId</code>	検索結果の表示に使用されるノード ID を指定します。 <code>ssTargetSiteId</code> は、コンテンツ・サーバー上の他の Web サイトへのリンクを生成するためにも使用できます。 <code>ssTargetSiteId</code> が指定されない場合、生成されるリンクでは、リンク元と同じサイトであるとみなされます。
<code>ssTargetSiteId</code>	検索結果の表示に使用されるサイト ID を指定します。 <code>ssTargetNodeId</code> パラメータは、ターゲット・ノードを完全修飾するためにも使用する必要があります。
<code>ssSourceNodeId</code>	リンクを含む現行ページのノード ID を指定します。
<code>ssSourceSiteId</code>	リンクを含む現行ページのサイト ID を指定します。
<code>ssWebsiteObjectType</code>	検索結果を特定の Website Object Type に限定するように指定します。通常、この値は空にしておきます。
<code>ssUserSearchText</code>	全文検索を実行するために任意のユーザー・テキストを指定します。通常、これは Search Results フラグメントのみに適用されます。値は、Search Box フラグメントに値を入力するコンシューマが指定します。

`SS_GET_SEARCH_RESULTS` サービス・コールの結果をループ処理するとき、通常は、結果セットの新しい `ssUrl` 列を使用して、そのアイテムに対するハイパーリンクを作成します。これで、暗号化された ID ベースの URL ではなく、フルパスベースの URL が使用されるようになります。

また、これらの URL には、リンク元のロケーションを表すパラメータを付ける必要があります。これにより、無効なリンクに対して適切にエラー・ページを生成することができます。

次のパラメータを URL に追加してください。

パラメータ	説明
<code>ssSourceNodeId</code>	ソース・ノード ID を宣言します。 <code>ssTargetNodeId</code> と <code>xWebsiteSection</code> の両方が空の場合に、わかりやすい URL を生成するために使用されます。
<code>ssSourceSiteId</code>	ソース・サイト ID を宣言します。これにより、ターゲット・ページが見つからない場合に、エラー・ページを表示することができます。

Idoc スクリプトを使用する簡単な例を次に示します。

```
<!-- New params for SS_GET_SEARCH_RESULTS -->
<!--$ssLimitScope="true"-->
<!--$ssDontShowInLists="true"-->
<!--$ssTargetNodeId=""-->
<!--$ssTargetSiteId=""-->
<!--$ssSourceNodeId=nodeId-->
<!--$ssSourceSiteId=siteId-->
<!--$ssWebsiteObjectType=""-->
<!--$ssUserText=""-->

<!--$executeService("SS_GET_SEARCH_RESULTS")-->

<!--$loop SearchResults-->
  <a href="<!--$ssUrl-->?ssSourceSiteId=<!--$siteId-->&ssSourceNodeId=
<!--nodeId-->">
    <!--$dDocTitle-->
  </a><br><br>
<!--$endloop-->
```

詳細は、Site Studio 製品で提供される動的リストおよび検索結果のフラグメントを参照してください。

B.4.4 カスタム要素の更新

7.5 より前のリリースの Site Studio を使用して作成したカスタム要素フォームは、Site Studio 10gR4 と互換性がありません。手動でアップグレードし、再度オーサリングする必要があります。下位互換性を保持しない主な理由は、Site Studio が以前に Internet Explorer 独自仕様である「window.external」機能に依存していたためです（ActiveX コントロールがコントリビュータ・アプリケーションで使用されていたため）。この機能は、Site Studio 10gR3 (10.1.3.3.3) 以降で使用されている、ブラウザに依存しない JavaScript ベースのコントリビュータ・アプリケーションにより、Site Studio から削除されました。詳細は、『Site Studio テクニカル・リファレンス・ガイド』を参照してください。

B.4.5 フォルダへの Web Site Section の割当て

Site Studio では、サイト階層の設定や管理に Content Server のフォルダ (Folders コンポーネント) を使用することはなくなりました。7.5 より前の Site Studio で作成した Web サイトをアップグレードした場合、フォルダに含まれるコンテンツに新しいメタデータ値 (Web Site Section) が割り当てられて、コンテンツがアップグレード済のサイトの一部として認識されます。

アップグレード後にフォルダに追加した新しいコンテンツには、このメタデータ値は割り当てられません。このため、コンテンツをサイトに追加するためにフォルダの使用を継続する場合は、各フォルダに Web Site Section の値を割り当てる必要があります。

Web Site Section の値を割り当てるには、次のようにします。

1. 更新するフォルダの書込み (RW) アクセス権を持つユーザーとしてコンテンツ・サーバーにログオンします。
2. 「Browse Content」トレイまたはメニューを開き、「Web Sites」ツリーを開きます。
3. 更新する Web サイトを選択します。
4. 変更する特定のフォルダについて「Folder Information」をクリックします。
5. 「Update」アクションを選択します。
6. 「Web Site Section」フィールドの横の「Browse」をクリックします。
7. 対応する「Web Site Section」を選択します。
8. 「OK」をクリックします。

9. 「Update」をクリックします。
10. Site Studio で「Web Site Section」にマップするフォルダごとにこの手順を繰り返します。

B.4.6 JSP コードの更新

SiteStudio.SSNavigationBean オブジェクトおよび SiteStudio.SSNavigationNode オブジェクトに基づいて JSP コードを作成している場合は、これらのオブジェクトへの参照を変更する必要があります。次のように、すべて小文字で `sitestudio` とします。

- `sitestudio.SSNavigationBean`
- `sitestudio.SSNavigationNode`

索引

数字

10gR4 より前のプロジェクトの自動アップグレード, B-2
7.5 より前のサイトのアップグレード, B-3
7.5 より前のプロジェクトのアップグレード
 <base> タグ, B-8
 GET_SEARCH_RESULTS サービス, B-8, B-10
 JSP コード, B-12
 SS_GET_PAGE, B-8
 カスタム・フラグメント, B-7
 カスタム要素, B-11
 完全アップグレード, B-5
 検索索引, B-7
 コンテンツ・サーバーのアップグレード, B-3
 最小アップグレード, B-6
 サイト・セクション, B-11
 サイト・ナビゲーション, B-7
 自動アップグレード, B-2
 単一のコンテンツ・サーバー, B-3
 フォルダ, B-11
 複数のコンテンツ・サーバー, B-3

A

Active Server Pages (ASP), 2-4, 2-9
Apache Web サーバー, 2-4, 2-5
ASP, 2-4, 2-9

B

<base> タグ, B-8

C

Check Out and Open, 1-3
ClusterNodeAddress, 2-10
Content Server
 ASP, 2-4, 2-9
 Folders 機能, 1-3, B-2, B-3, B-11
 JSP, 2-4, 2-8
 「Site Studio Certificate Validation」 ページ, 5-6
 検索索引, 1-3, 2-11, B-7
 サイトのアップグレード, B-3
 サイトの完全アップグレード, B-5
 サイトの最小アップグレード, B-6
 索引付け, 1-3
 パッチ, 1-2
 要件, 1-2

レガシー・プロジェクトへのアップグレード, B-3
Content Server での ASP の有効化, 2-4, 2-9
Content Server での JSP の有効化, 2-4, 2-8
Content Tracker, 1-3
CS10gR3CoreUpdate パッチ, 1-2
CS10gR3NativeUpdate パッチ, 1-2
CS752Update パッチ, 1-2

D

DBSearchContainsOpSupport コンポーネント, 1-2
DisableSiteStudioContribution 変数, 5-5
Dynamic Converter, 1-3

E

Ephox, 5-6
 デバッグ, 5-9
 認証検証, 5-6
Ephox 証明書の検証, 5-6
Exclude From Lists メタデータ・フィールド, 5-4

F

FCKeditor, 5-6

G

GET_SEARCH_RESULTS サービス, B-8, B-10

I

IdcClientLoginForm タグ, 5-8
IdcCommandUX コンポーネント, 2-9
IIS, 2-7

J

Java Virtual Machine (JVM), 1-4, 5-6
JavaServer Pages (JSP), 2-4, 2-8, B-12
JSP, 2-4, 2-8, B-12
JSP が有効なグループ, 2-8
JSP サポートの再デプロイ, 2-8
JVM, 5-6

N

NameTrans (Sun ONE Web サーバー), 2-4, 2-6

R

Region Definition メタデータ・フィールド, 5-4

S

Site Studio

10gR4 より前のプロジェクト, 5-9, B-1

アップグレード, 2-4

概要, 1-2

ドキュメント, 1-5

メタデータ・フィールド, 2-4, 2-7, 5-2

「Site Studio Certificate Validation」 ページ, 5-6

Site Studio コンポーネント

アンインストール, 2-2, A-2

インストール, 2-1, 2-3

インストール後の考慮事項, 2-4

インストール前の考慮事項, 2-2

Site Studio コンポーネントのアンインストール, 2-2, A-2

Site Studio のメタデータ・フィールド, 2-4, 2-7

Site Studio メタデータ・フィールド

Exclude From Lists, 5-4

Region Definition, 5-4

Web Site Object Type, 5-2

Web Site Section, 5-2, B-11

Web サイト, 5-2

SiteStudio コンポーネント, 1-2

SS_GET_PAGE, B-8

SS_GET_SEARCH_RESULTS サービス, B-8, B-10

SSDefaultEditor 変数, 5-6

SSEditorDebugLevel 変数, 5-9

SSEnableExtranetLookCompatibility 変数, 5-8

SSExtraCertificateClasses 変数, 5-7

SSExtraCertificateJars 変数, 5-7

SSExtraCertificateLabels 変数, 5-7

SSHtpLayerManager 変数, 5-7

SSNavigationBean オブジェクト, B-12

SSNavigationNode オブジェクト, B-12

SSO, 5-8

SSO の構成, 5-8

SSUrlMapPlugin

コンポーネント, 2-4, 2-7

Sun ONE Web サーバー, 2-4, 2-6

U

URL

パスベース, 2-4, 2-5, B-8

W

wcm.console.htm, 5-8

wcm.toggle.js, 5-5

Web Site Object Type メタデータ・フィールド, 5-2

Web Site Section メタデータ・フィールド, 5-2, B-11

Web Sites メタデータ・フィールド, 5-2

Web サーバー

Apache, 2-4, 2-5

Sun ONE, 2-4, 2-6

Web サイト, B-3

window.external 機能, 5-6, B-11

X

xDontShowInListsforWebsites メタデータ・フィールド, 5-4

xRegionDefinition メタデータ・フィールド, 5-4

xWebsiteObjectType メタデータ・フィールド, 5-2

xWebsiteSection メタデータ・フィールド, 5-2, B-11

xWebsites メタデータ・フィールド, 5-2

あ

アップグレード

Web サイト, 2-4

アドオン

Check Out and Open, 1-3

Content Tracker, 1-3

Dynamic Converter, 1-3

い

インストール

Apache Web サーバー, 2-4, 2-5

ApacheSun ONE 構成, 2-5

Apache 構成, 2-4

Content Server での ASP の有効化, 2-4, 2-9

Content Server での JSP の有効化, 2-4, 2-8

Sun ONE Web サーバー, 2-4, 2-6

Sun ONE 構成, 2-4, 2-6

コンポーネント, 2-1, 2-3

ゾーン・フィールド, 2-4, 2-7

デザイナー, 3-1

デザイナー・アプリケーション, 3-2

デフォルトのプロジェクト・ドキュメント情報, 2-4, 2-5

プロセス, 1-4

インストール後の作業と考慮事項, 2-4

インストール前の作業と考慮事項, 2-2

え

エディタ, コントリビュータのデフォルト, 5-6

か

カスタム・フラグメント, B-7

カスタム要素, 5-6, B-11

カスタム要素の更新, 5-6, B-11

仮想キー・コード, 5-5

く

クラスタ化環境

ASP の構成, 2-9

け

検索および索引付け, 1-3

検索結果, B-8, B-10

検索結果のサービス, B-8, B-10

検索索引, 1-3, 2-11, B-7

検索索引の再作成, 1-3, 2-11, B-7

こ

構成

- Apache, 2-4, 2-5
- Sun ONE, 2-4, 2-6
- ゾーン・フィールド, 2-4, 2-7

構成変数

- DisableSiteStudioContribution, 5-5
- SSDefaultEditor, 5-6
- SSEditorDebugLevel, 5-9
- SSEnableExtranetLookCompatibility, 5-8
- SSExtraCertificateClasses, 5-7
- SSExtraCertificateJars, 5-7
- SSExtraCertificateLabels, 5-7
- SSHhttpLayerManager, 5-7
- コンテンツ・サーバーのフォルダ, 1-3, B-2, B-3, B-11
- コントリビューション画像, 4-2
- コントリビューション・モード, 4-2
 - キーの組合せ, 5-5
- コントリビューション・モードのキーの組合せ, 4-2, 5-5
- コントリビューション・モードのショートカット, 5-5
- コントリビュータ
 - 開始, 4-2
 - 概要, 4-2
 - キーの組合せ, 5-5
 - 消費サーバーのアクセス, 5-5
 - デバッグ, 5-8
 - デフォルト・エディタ, 5-6
 - 認証検証, 5-6
 - 要件, 1-4, 4-2
- コントリビュータのアプレット, 5-6
- コントリビュータの開始, 4-2
- コントリビュータの起動, 4-2
- コントリビュータのデバッグの有効化, 5-8
- コントリビュータのロギング・レベル, 5-9
- コンポーネント
 - Check Out and Open, 1-3
 - DBSearchContainsOpSupport, 1-2
 - IdcCommandUX, 2-9
 - Site Studio, 2-1, 2-3
 - SiteStudio, 1-2
 - SSUrlMapPlugin, 2-4, 2-7
 - インストーラ, 2-1, 2-3

さ

- サイト, 「Web サイト」も参照
- サイト・セクションおよびフォルダ, B-11
- サイト・ナビゲーション, B-7
- サイトの完全アップグレード, B-5
- サイトの最小アップグレード, B-6
- サイトのナビゲーション, B-7
- 索引付け, 1-3

し

システム要件

- コントリビュータ, 1-4, 4-2
- デザイナー, 1-3, 3-2
- マネージャ, 1-3
- 消費サーバー, アクセス禁止, 5-5
- 消費サーバーのアクセス, 5-5

- 消費サーバーのアクセス禁止, 5-5
- 署名済アプレット, 5-6
- シングル・サインオン (SSO), 5-8

せ

- 全文索引付け, 2-4, 2-7

そ

- ゾーン・フィールド, 2-4, 2-7

た

- 単一のコンテンツ・サーバー, サイトのアップグレード, B-3

て

デザイナー

- アンインストール, A-2
- インストーラ, 3-1, 3-2
- 開始, 3-2
- 概要, 3-2
- 要件, 1-3, 3-2
- デザイナーのアンインストール, A-2
- デザイナーの開始, 3-2
- デザイナーの起動, 3-2
- デバッグ, 5-8
- デバッグのロギング・レベル, 5-9
- デフォルトのコントリビュータ・エディタ, 5-6
- デフォルトのプロジェクト・ドキュメント情報, 2-4, 2-5

と

- ドキュメント, 1-5

に

- 認証検証アプレット, 5-6

は

- バスベース URL, 2-4, 2-5, B-8
- パッチ
 - CS10gR3CoreUpdate, 1-2
 - CS10gR3NativeUpdate, 1-2
 - CS752Update, 1-2

ふ

- 複数のコンテンツ・サーバー, サイトのアップグレード, B-3
- フラグメント, カスタムの更新, B-7
- プロキシ・サーバー, 1-2
- プロジェクト
 - 10gR4 より前のプロジェクトの使用, 5-9
 - 7.5 より前のプロジェクトのアップグレード, B-1
- プロジェクト・ファイルのメタデータ, 2-4, 2-5
- プロジェクト・メタデータ, 2-4, 2-5

へ

変数, 「構成変数」を参照

ま

マネージャ
要件, 1-3

め

メタデータ・フィールド, 5-2
Exclude From Lists, 5-4
Region Definition, 5-4
Web Site Object Type, 5-2
Web Site Section, 5-2, B-11
Web サイト, 5-2

よ

要件
Content Server, 1-2
コントリビュータ, 1-4, 4-2
デザイナー, 1-3, 3-2
マネージャ, 1-3
要素, カスタムの更新, 5-6, B-11

り

リンク
<base> タグ, B-8
SS_GET_PAGE, B-8

れ

レガシー・サイトのアップグレード, B-3
レガシー・プロジェクト, 5-9, B-1